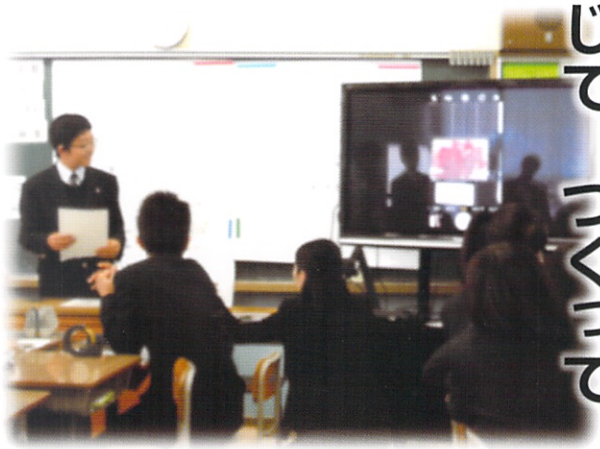
第35回 東京都中学校美術教育研究大会
第5ブロック大会 足立大会

中央区・台東区・荒川区・足立区

「未来に向けて 美術教育のさらなる一歩」

― 感じて つくって つなげて ―



平成29年12月1日(金)

会場：足立区立千寿青葉中学校

第35回 東京都中学校美術教育研究大会

第5ブロック大会 足立大会

中央区・台東区・荒川区・足立区

「未来に向けて　美術教育のさらなる一歩」
― 感じて　つくって　つなげて ―

平成29年12月1日(金)

会場：足立区立千寿青葉中学校

主催　東京都中学校美術教育研究会

後援　東京都教育委員会　東京都中学校校長会　東京都中学校教育研究会
中央区教育委員会　台東区教育委員会　荒川区教育委員会　足立区教育委員会
足立区中学校校長会　足立区立中学校教育研究会

目次

1 大会実施要項 …… 3

2 全体会記録

① 開会の言葉　足立区立栗島中学校　副校長　田原　好子
② 主催者挨拶　東京都中学校美術教育研究会会長　練馬区立三原台中学校　校長　江川　誠志
③ 実行委員長挨拶　第５ブロック大会実行委員長　足立区立竹の塚中学校　校長　茜谷　佳世子
④ 来賓祝辞　足立区教育委員会　教育長　定野　司
東京都教職員研修センター　統括指導主事　松永　かおり
⑤ 来賓紹介
⑥ 基調提案　第５ブロック大会研究局長　荒川区立諏訪台中学校　教諭　大黒　洋平
⑦ 講評・記念講演　文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官
国立教育政策研究所研究開発部教育課程調査官　東良　雅人　先生
⑧ 次回大会実行委員長挨拶　葛飾区立大道中学校　校長　殿村　靖廣
⑨ 閉会の言葉　足立区立栗島中学校　副校長　田原　好子

3 研究授業・誌上発表記録

（１）研究授業①　Ａ表現に関する授業「水って何色？どんな形？」 …… 16
足立区立第十中学校　山本　優里
誌上発表①　Ａ表現に関する授業「70 周年をプロデュース～パッケージデザイン～」 …… 18
足立区立第十四中学校　蓼沼　奈央
（２）研究授業②　Ａ表現に関する授業「マイ・フェイバリット・箸置き」 …… 20
足立区立西新井中学校　久保田　李夏
誌上発表②　Ａ表現に関する授業「渕江中に潜むヨウセイ」 …… 22
足立区立渕江中学校　志手　伸圭
（３）研究授業③　Ｂ鑑賞に関する授業「学芸員になりきり展覧会」 …… 24
台東区立上野中学校　下斗米　麻里
誌上発表③　Ｂ鑑賞に関する授業「校内ギャラリーを考察する」 …… 28
中央区立晴海中学校　永見　久美子
（４）研究授業④　Ｂ鑑賞に関する授業「じっくりみるとみえてくるもの」 …… 30
荒川区立原中学校　桐　菜摘
誌上発表④　Ｂ鑑賞に関する授業「自画像に思いを込めて…」 …… 32
荒川区立第五中学校　品田　智

4 大会運営組織一覧 …… 34

5 次回大会案内 …… 35

第35回 東京都中学校美術教育研究大会
第５ブロック大会 足立大会　実施要項
中央区・台東区・荒川区・足立区

１　大会テーマ　「未来に向けて　美術教育のさらなる一歩」

―　感じて　つくって　つなげて　―

２　期　　日　平成29年12月１日（金）午後１時20分より　（12時30分より受付）

３　会　　場　足立区立千寿青葉中学校
受付・全体会：体育館　研究授業会場・協議会場：特別教室および普通教室

４　内　　容

研究授業	研究授業指導者	授業会場	協議会会場
A表現「水って何色？どんな形？」	足立区立第十中学校　山本　優里	３階１年２組	２階２年１組
A表現「マイ・フェイバリット・箸置き」	足立区立西新井中学校　久保田　李夏	１階美術室	２階学習室
B鑑賞「学芸員になりきり展覧会」	台東区立上野中学校　下斗米　麻里	３階１年３組	２階２年２組
B鑑賞「じっくりみるとみえてくるもの」	荒川区立原中学校　桐　菜摘	３階１年４組	２階２年３組

誌上発表	指導案作成者	
A表現「70周年をプロデュース ～パッケージデザイン～」	足立区立第十四中学校　蓼沼　奈央	体育館で スライド上映
A表現「渕江中に潜むヨウセイ」	足立区立渕江中学校　志手　伸圭	
B鑑賞「校内ギャラリーを考察する」	中央区立晴海中学校　永見　久美子	
B鑑賞「自画像に思いを込めて…」	荒川区立第五中学校　品田　智	

５　全体会次第

①　開会の言葉　足立区立栗島中学校　副校長　田原　好子
②　主催者挨拶　東京都中学校美術教育研究会会長　練馬区立三原台中学校　校長　江川　誠志
③　実行委員長挨拶　第５ブロック大会実行委員長　足立区立竹の塚中学校　校長　茜谷　佳世子
④　来賓祝辞　足立区教育委員会　教育長　定野　司
東京都教職員研修センター　統括指導主事　松永　かおり
⑤　来賓紹介
⑥　基調提案　第５ブロック大会研究局長　荒川区立諏訪台中学校　教諭　大黒　洋平
⑦　講評・記念講演　文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官
国立教育政策研究所研究開発部教育課程調査官　東良　雅人　先生
⑧　次回大会実行委員長挨拶　葛飾区立大道中学校　校長　殿村　靖廣
⑨　閉会の言葉　足立区立栗島中学校　副校長　田原　好子

主催者あいさつ

東京都中学校美術教育研究会会長　練馬区立三原台中学校　校長　江川　誠志

第３５回東京都中学校美術教育研究大会第５ブロック大会を、足立区を会場に中央区・台東区・荒川区・足立区の４区共同で開催できますことに、感謝申し上げます。また、本日はご多用の中、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官　東良　雅人様、足立区教育委員会教育長代理　小池　康之様、東京都教職員研修センター研修部教育経営課統括指導主事　松永　かおり様はじめ、多くのご来賓の皆様のご臨席を賜りましたことに御礼申し上げます。

今、社会が急激に変化し予測困難な時代の中で、教育も時代の変化に即した対応が求められています。本研究会では、平成２９年３月に文部科学省より示された新学習指導要領の社会に開かれた教育課程の理念等を踏まえながら、第１０ブロック及び第４ブロック大会で継続してきた「つなげて」をキーワードに、今回のテーマを「未来に向けて　美術教育のさらなる一歩」　―感じて　つくって　つなげて―　として研究に取り組んでまいりました。これまでの実践の蓄積の上に立ち、この先１０年後を見据えた授業づくりや授業改善を通して、よりよい社会と幸福な人生の創り手としての力を養わせることができると確信しております。

また、都中美では今年度も府中市美術館と荒川区立諏訪台中学校を会場として、８月の２日間、「美術館を活用した対話による鑑賞研修」と「生徒作品持ち寄りによる協議・発表研修」の夏季研修会を実施しました。対話による鑑賞では、生徒の新しい見かたや考え方を引き出し、作品に対する自分の価値意識をもって話し合い、鑑賞の能力を高めることをねらいとしました。協議・発表研修では、「生活や社会と豊かにかかわる美術」という前年度のテーマを継続し、研究を深める取組が本研究大会へとつながっております。今回の夏季研修会では、両日とも若手教員の参加者の数が目を引きました。都中美を牽引するベテラン教員の指導力を、次代を担う若手教員へと継承させながら、人と人とのつながりの中で育成にも力を注いでまいります。平成３０年度には、関東甲信越静地区造形教育研究大会が葛飾区を会場として開催されますが、今後も、東京都全体の美術科教員が一丸となり、美術教育の一層の充実と発展に向けて研究に邁進してまいります。

最後になりましたが、本研究大会の開催につきまして、多くのご指導とご支援をいただきました東京都教育委員会をはじめ、関係諸機関の皆様に心より感謝申し上げます。また、ここにご参会の皆様の益々のご発展を祈念申し上げまして、お礼の言葉とさせていただきます。

実行委員長あいさつ

第５ブロック大会実行委員長　足立区立竹の塚中学校　校長　茜谷　佳世子

この度、第３５回東京都中学校美術教育研究大会が、第５ブロック一丸となり、足立区を会場として開催されるはこびとなりました。今日にいたるまで、各方面でご支援とご協力をいただき、あらためて関係の皆様にお礼を申し上げます。また、本日は大変ご多用の中、文部科学省:初等中等教育局教育課程課教科調査官　東良　雅人様、足立区教育委員会 教育長(代理)　小池康之様、東京都教職員研修センター研修部教育経営課　統括指導主事　松永　かおり様はじめ、多くのご来賓の皆様のご臨席を賜りましたことに、心から感謝申し上げます。

第５ブロックは、中央区・台東区・荒川区・足立区で構成されております。５６校の中学校があり、専任の美術科教員は３６名が配置されています。学校に一人配置がほとんどの現状から、一人一人の教員が現在の生徒・学校・社会の状況を分析し、授業を実践していくなかで「生徒に身に付けさせる力、教員が育てる力とは何か」「求められる美術の授業とは何か」など区を越えて協議・研究できたことは意義深いことであり、喜ばしいことでした。造形美術教育の研修を通して地区を越えて美術科教員が結束をする意義や必要性を痛感した一年間でもありました。

本大会では、テーマを「未来に向けて　美術教育のさらなる一歩」 ―感じて　つくって　つなげて―　としました。これまでの研究や授業実践をふまえ、２０年後に生きる生徒の姿を見据えた授業づくりや授業改善を意識してきました。研究のキーワードである『感じて』『つくって』『つなげて』は、生涯にわたり主体的に人生を切り拓いていく力につながっていくことであると本研究では見いだしております。夏季研修会で、本日講評をいただく東良先生より、「学びとは創造活動の過程にあり、指導者は学びを見取る力が必要」であることのご指導をいただきました。その言葉を胸にきざみ、今後も、研究を通して培った絆を大切にして５ブロック美術科教員がより結束し、教科の特性を重視した指導を工夫・開発し、授業のより一層の充実を図りたいと思います。

結びになりますが、本研究大会にあたり、各教育委員会をはじめ各中学校長会、東京都現代美術館、各関係機関にはご支援とご理解を賜りましたことに、深く感謝申し上げます。また、会場となりました足立区立千寿青葉中学校の鈴木校長先生はじめ教職員の皆様には多大なご協力とご支援をいただきました。感謝とお礼を申し上げます。皆々様のますますの発展を御祈念申し上げ、あいさつとさせていただきます。

来賓祝辞

足立区教育委員会　　教育長　定野　司

「成長エンジン」

第35回東京都中学校美術教育研究大会 第5ブロック大会 足立大会が盛大に開催されますこと、心よりお慶び申し上げます。

今大会の研究テーマは、「未来に向けて 美術教育のさらなる一歩」―感じて つくって つなげて― です。これからの時代をたくましく生き抜くには、子供たち一人一人に「成長エンジン」が必要です。ヒトは成長するのが分かる（楽しい）から生きています。

足立区では平成28年2月、“これからを生き、将来、社会の担い手となる子供たちをどのように育て上げるか”という足立区の教育に関する基本的な姿勢を示す「足立区教育大綱」を策定いたしました。その理念は「夢や希望を信じて生き抜く人づくり」です。

社会の変化に受け身ではなく主体的に向き合える子供、膨大な情報から何が重要かを主体的に判断できる子供、自ら課題を見つけ、周囲の人と協働しながらその解決にあたり、新たな価値を生み出し、自らの可能性を引き出せる子供、そういう「成長エンジン」を持った子供を育てることが指導者の使命です。そのためには、「教える」から「学ぶ」へ、指導者本位の授業を、学習者本位の授業へ転換しなくてはなりません。

次期学習指導要領では、「何を学ぶ」から「どのように学ぶか」へ、主体的、対話的、そして深い学びが求められていますが、その目標は、学びを人生や社会に活かそうとする学びに向かう力、人間性の涵養にあります。また、美術科では、感性や創造力を働かせ、生活や社会の中の形や色、美術、美術文化などと豊かに関わる資質・能力の育成を目指すことが明確化されました。つまり、子供たちの「描きたい、つくりたい、見たい」気持ちを引き出すことが重要です。大切なのは、子供たちに必要な成長エンジンを授業や学校生活の中でいかに身に付けさせることができるかということであり、子供の中にある答えを引き出すことです。美術科は無から有を生み出す楽しみを知ることのできる教科です。本大会の研究を通じ、これからの美術教育が子供たちにとって、さらに楽しいものになることを期待しています。

最後に、本大会の開催にあたり、ご尽力いただきました皆様に心から感謝申し上げるとともに、東京都中学校美術教育研究会のさらなる発展を祈念し、お祝いの言葉とさせていただきます。

教育委員会委員長 定野様は定例会議のため 代読小池様

来賓祝辞

東京都教職員研修センター　統括指導主事　松永　かおり

第 35 回東京都中学校美術教育研究大会　第５ブロック　足立大会の開催にあたり、東京都教育委員会を代表して一言ご挨拶申し上げます。はじめにこれまで本会が東京都の美術教育の充実と発展に多大なる貢献をされてこられましたことに対し、深く敬意を表すとともに日頃から東京都教育委員会の施策に、ご理解とご協力をいただいておりますことに、厚く感謝申し上げます。

さて、昨年度末に文部科学省から新しい学習指導要領が公示されました。先生方に置かれましては、現行の学習指導要領による、これまでの指導の成果と課題を明らかにしたうえで、平成３３年度の完全実施に向けて、新学習指導要領に示された美術科における理念の具現化に向けて、準備を進めておられることと思います。これからの中学校の美術科では、感性や想像力等を働かせて、表現したり、鑑賞したりする資質能力を相互に関連させながら育成できるよう、内容の改定を図ることや、生活を美しく豊かにする造形美術の働き、美術文化についての理解を深める学習の充実を図ることが求められております。

また、まずは教師自身が美術は何を学ぶ教科なのかをしっかり把握し、育成を目指す資質能力を明確にしたうえで、知識及び技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力、人間性等の３つの柱を相互に関連させながら、生徒の発達の段階や特性を踏まえた指導を、一層推進していく必要があります。

本日はそのような中で「未来に向けて、美術教育のさらなる一歩」　―感じて　つくって　つなげて―　を大会テーマとして、研究大会が開催されております。本会が先ほど申し上げたような指導について、具体的にとらえることができる授業公開等をしていただき、研究成果を広く還元させていただくことは大変意義深いことです。またこの後は、文部科学省初等中等教育局　教育課程課教科調査官　国立教育政策研究所　研究開発部教育課程調査官　東良　雅人 先生から指導・講評いただくと伺っております。これからの美術教育について様々なご示唆をいただけるものと存じます。

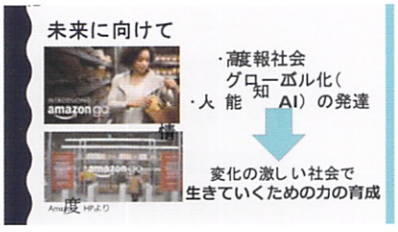
本日ここにお集まりの皆様は、各地域で美術教育の推進のために中心的な役割を果たされていることと思います。本研究会での実践や研究の成果をそれぞれの地域や学校で発信していただくとともに、教師としての資質の向上を図り、東京都の美術教育のさらなる活性化と充実に向けてお力を発揮していただきますよう、お願い申し上げます。

結びにあたりまして、関係者の皆様方のご健勝と本会のご発展を祈念して、あいさつといたします。

基調提案

荒川区立諏訪台中学校　大黒　洋平

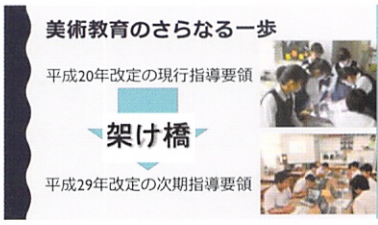
第５ブロック大会では、「未来に向けて　美術教育のさらなる一歩」という主題を掲げ、－感じて　つくって　つなげて－　という副題のもと、研究授業の進め方や誌上発表の在り方、大会運営などの改善を図ることなどの工夫を経て、活動してまいりました。



平成 29 年は、新しい学習指導要領が示された年です。だからこそ、「平成 20 年に示された現行の指導要領をしっかりと読み返し、現行の指導要領に即してできる授業とは何か？」という視点を大切にして、研究授業および誌上発表の準備をしてきました。

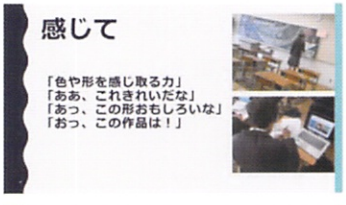
「未来に向けて」ということばには、新しい学習指導要領が示す通り 20 年後に活躍するこどもたちの姿を想像した視座が含まれています。

約 20 年後には、多くの職業が機械化され、本来人間が行っていた仕事が機械にゆだねられるという予測があります。急速な時代の流れや技術の革新に対応していくためには、変化の激しい未知の状況において、自ら得た知識や経験をもとに対応していく力が必要になってきます。このような変化の激しく予測のつかない社会状況で生きていくためには、学校教育段階において、「どんな困難な状況になっても、未来をみつめ、生き抜いていくための知識や経験を生徒に身につけさせること」が社会的に求められているといえます。



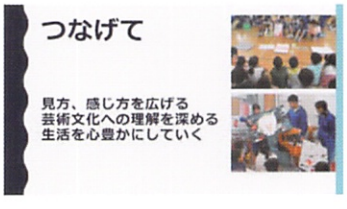
「美術教育のさらなる一歩」ということばには、新しい指導要領に向けての架け橋になる要の大会だという思いがあります。これまで、美術科教員が積み上げ、研究を重ねてきた成果を次世代へつなげていかなければなりません。現行指導要領を踏まえて、次の学習指導要領実施に向けて、今ここで、授業実践を振り返り、改善することで、新しい指導要領につなげ、未来に向けて研究を継続させていくきっかけになるかと思います。

本日の研究授業や誌上発表の指導案は、現在の学習指導要領で掲げられている「すべての教科での言語活動の充実」や「思考力・判断力・表現力の育成」の視点を大切に、協議を重ねてつくってきたものです。この研究の過程と本日の授業が成果として、新しい学習指導要領で新たに加えられた「主体的・対話的で深い学び」や「カリキュラムマネジメント」の視点での授業改善につながり、20 年後の社会を意識した授業改善のきっかけとなるでしょう。大会副題の　―　感じて　つくって　つなげて　―　にも、「これまで美術教育で培ってきたこと」と「これからの美術教育に向けてのまなざし」が含まれ、授業改善のキーワードとしてもこの３つの力が育てたい資質・能力につながっています。



「感じて」には、「色や形を感じ取る力」。日々の生活や授業を通して生まれる「ああ、これきれいだな」「あっ、この形おもしろいな」「おっ、この作品は！」と感受する力。指導要領解説にも示されている「様々な対象・事象からよさや美しさなどの価値や心情などを感じ取る力」です。私たち美術科教員が一番大切にしなければいけない部分ともいえるのではないでしょうか。

「つくって」には様々なメディアを通して創造する力や新しい価値を生み出しながらみたり、つくったりする力。そこには、新たに何かを創造していく楽しさや喜び、つくりだした時の達成感や満足感があります。



「つなげて」には、他者との関わりを通して発信する力や自分とは異なる別の世界と関係して新しい価値観をつくり出す力。美術の授業を通して見方や感じ方を広げ、異文化への理解を深め、生活を豊かにしていく態度を育みます。これら３つの力を日々の美術の授業で大切にし、３年間の中学校美術の授業で身につけさせたい資質・能力を明確にし、系統的、計画的な授業を設定していくことが大切ではないでしょうか。

今回、作品ありきの大会ではなく、あくまで指導案の内容を深めることを研究の中心にして進めてきました。このことで、指導案作成者の負担を減らし、コンパクトな大会運営をすることができました。

A 表現に関する授業では、生活と密着した題材を設定することで、生徒の生活経験から色や形のイメージを

とらえ、自ら進んで表現活動に取り組める工夫がなされています。

B 鑑賞に関する授業では、美術館の学芸員の方と連携による授業やタブレット PC を活用した鑑賞の授業を設定することで、美術館のコレクションを用いた鑑賞活動やグループ活動による作品を鑑賞させたり、ICT 機器の利用により個別に高精細の画像を見ることで、生徒の興味関心が高まる鑑賞活動の工夫がなされています。外部との連携による授業は、昨今、求められている教員の授業プロデュース能力を高める工夫があり、ICT 機器の活用授業は、教員の ICT 活用能力を高める授業になっています。

今回は、平成 26 年度より小中学校の全児童生徒に一台ずつタブレット PC が配備されている荒川区よりタブレット PC を持ってきて授業を行っていますが、今後、数年で、どの地域でも電子黒板やタブレット PC を使って授業することが当たり前になる時代がやってくるでしょう。そのためには、教員のスキルアップも大切です。

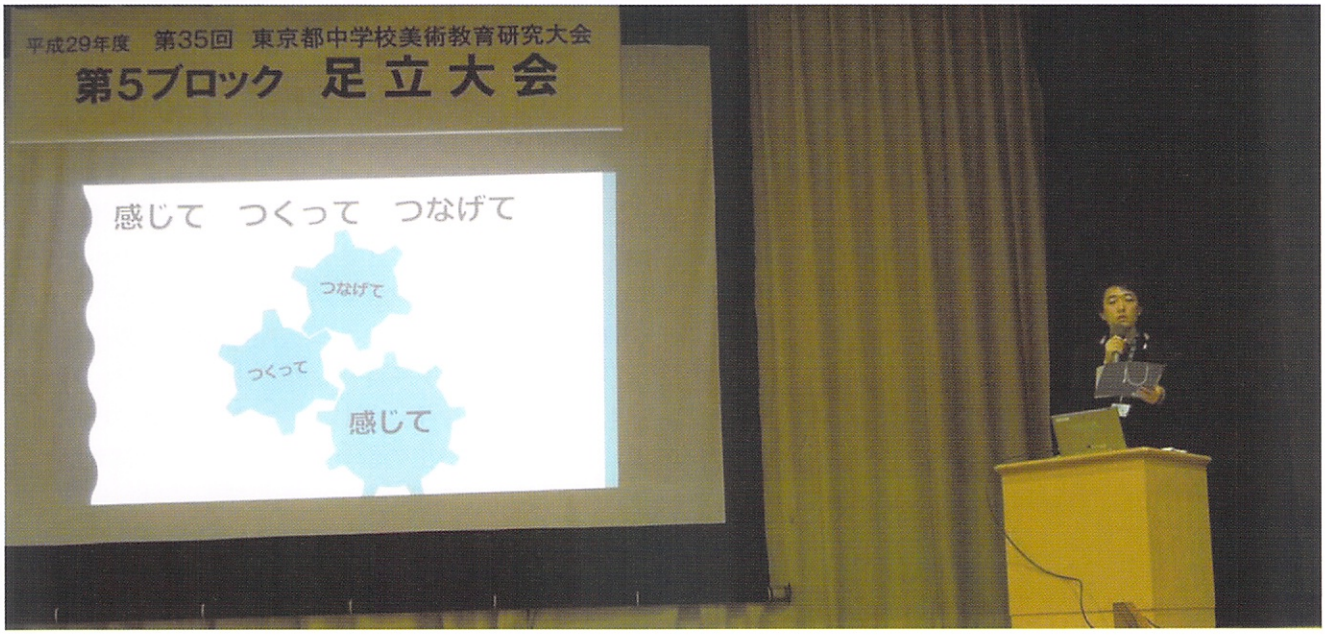
他機関と連携を図った授業実践の紹介としては、研究紀要 28 ページにある、学校から発信する「まちづくり」、PTA、地域、大学と連携した「ウィンドウ　グラフィックス」制作を通しての試みです。美術室の中だけの美術の学びではなく、美術科教員がプロデューサーとして地域に働きかけをして生徒が考えた学校のキャラクターを特色ある学校づくりとして、まちのキャラクターとして活用していく取り組みです。　最後になりますが、私たち美術科教員が置かれている状況は、年々厳しい状況になっていると言わざるを得ません。東京都全体をみても、中学校美術科の専任教員の減少により、区市町村単位の研究がままならない状況にあります。ベテラン教員の定年退職による若手教員の採用数の増加は、これまでの授業実践の伝承に警鐘をならしています。また、校務に追われる中で学校運営の大事なポストに就いている美術科の専任教員も少なくありません。

日々の美術室での生徒の様子や成果を校内に留まらず地域に広げ、地域の文化施設との連携や各市区町村で行われてきた美術教育の研究の集積や情報交換なども大切にしなければいけません。

ただ単に、指導がしやすく、評価がしやすいからといって生徒にセット教材を与えてつくらせたり、指導要領を全く理解せずに授業をしていたり、ただ最新の ICT 機器を使ったりしても新に創造的な授業にはなりません。私たち、美術科教員には、常日頃から目の前の生徒の授業での様子を見取り、変容を感じ取る敏感な力、生徒が主体的に活動できる表現及び鑑賞の授業の設定が必要です。そのためには、美術科の教員自身が創造性あふれる豊かな人間でなければなりません。

今回の大会は、都中美夏季研修での成果を反映しています。研究授業者や誌上発表者は、府中市美術館を会場として行われた美術館との連携研修や諏訪台中学校で行われた作品持ち寄り研修に参加しています。この第５ブロック内だけでなく、他の市区町村の教員との交流を深め研鑽をつんでいます。

今回の第５ブロック大会が、東京都の美術科教員が自信をもって実践研究に励みながら、未来への一歩を踏み出せる勇気とエネルギーのある研究の場として、つながりをもつ交流の場として一歩ずつ歩み寄りができる大会になれば幸いです。また、来年度開催される第６ブロック大会へとつながっていくことを期待しています。

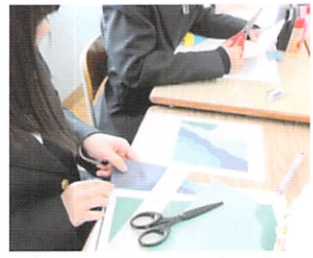


記念講演「中学校美術科教育の新しい学習指導要領の改訂の方向性」

文部科学省初等中等教育局教育課程課教育調査官　　東良　雅人様

本年の３月の末に新しい指導要領が公示され、平成33年度より中学校全面実施で、来年度より移行措置に入ることになります。そんな中、都中美の先生方の、子供の学びを追い求める姿、一丸となった組織としての取り組みを見て、なんと心強いことだろうと思います。

基調提案の中にあった「創造活動の糧に子供の活動学びが多くある」ですから、指導者は子供の学びを見取るだけの力を身につけることが求められてくるだろうと思います。子供の活動を単なる作業として見るのではなく、学びとしてみる。ここが非常に大切であると思います。



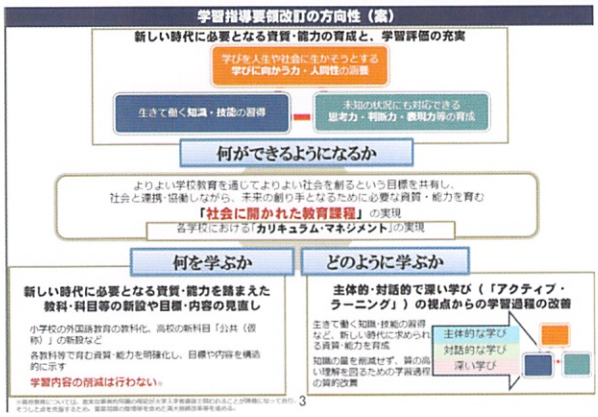
今日の４つの授業、まず、「水って何色？どんな形？」という授業は、先生が最初に「‘水だから水滴，‘水だから青，じゃない、水って何かな？そこからのイメージを表現するのですよ。」と説明され、子供たちは一生懸命アイディアスケッチを元にイメージを広げようとしていました。なかなか自分では気がつかなかったこと、発見できなかったことを友達と交流することによって様々な新しい価値や意味につながっていったり気づいたりしていく。こういう共同的なことも大切だと思います。

「じっくり見ると見えてくるもの」という授業では、タブレット端末を使った鑑賞の学習をされていました。最初一人でじっくり見る時間をとっていたのが大変印象的でした。まずは一人でしっかり作品と向きあってこそ自分の中に見方や感じ方が生まれてくる。そしてその見方や感じ方を元に隣の生徒と一緒に話しをする中で、新たな発見がありました。最初は恥ずかしそうにしても、だんだん自分の感じたことを言いたくなってくる。いろんな反応が返ってきたり、相手の言葉から更に新しい気づきが生まれ、活動が深まっていったと思います。

「学芸員になりきり展覧会」という授業では、現代美術館の学芸員の方に来ていただき授業が行われました。作品を眺めるだけではなく、社会的な視点に立ちながら展覧会をつくっていく授業でした。生徒たちが、社会的なテーマの中から作品と向き合って、鑑賞の深まりを目指していくものでした。子供たちは、最初はわからないと言っていても、グループで話し合っていくうちに様々な意見の中で、共通したイメージを持てるようになっていく場面もありました。

「マイ・フェイバリット・箸置き」という授業では、「自分がこうしたい」だけではなく、使う人の気持ち場所、どんな用途かなどを頭の中で思い浮かべながら、アイディアスケッチに取り組んでいました。アイディアスケッチは考えを整理していく役割。言葉の役割をしている。美術では言語活動の一環として、アイディアスケッチを位置づけています。ここでも、隣の友達と意見交流をしている姿が見られました。

今回の足立大会のテーマ「未来に向けて　美術教育のさらなる一歩」　ー感じて　つくって　つなげてー、の「未来に向けて」の「未来」とは紀要には、20年後にはAI（人工知能）の発達により、多くの職業が機械化され、従来人間が行っていた仕事が機械にゆだねられるという予測があると、書かれています。昨年度、中央教育審議会から出された答申の中に子供たちの現状と課題が書かれています。子供たちの学力は国内外の学力調査の結果によれば近年改善傾向にあるということ、子供たちの９割以上が学校生活を楽しいと感じ、保護者の８割は、総合的に見て学校に満足しているという結果が示されています。ただその反面、学ぶことの意義が実感できているかと言えば、非常に疑問がある。学ぶこと自分の人生と社会とのつながりを実感しながら、自らの能力を引き出し、学習したことを生活や社会の中の課題解決に生かしていくという面に非常に課題があるとも言われ、国際的に見て相対的に低いとも言われています。そして、判断の根拠や理由を確認しながら自分の考えを述べることについても課題であるということ。情報化の進展に伴い視覚的な情報と、言葉の結びつきが非常に希薄だということ、読解力にも課題があるとも言われています。そのほかには、自然の大切さや文化芸術を体験しながら感性を高めるような機会が限られているという指摘。道徳教育においては、人としてよりよく生きるうえで大切なものは何か。このような指摘もあります。



そういった課題の中、今日の４つ授業、「水って何色？どんな形？」は心豊かな表現を構想する力を目指している。「学芸員になりきり展覧会」は見方や感じ方を広げよう、作品との関わりから世界を子供たちにつなげていこうとしている。「マイ・フェイバリット箸置き」では、より豊かな人生を送るということを実感させようとしている。今回の授業は自分や社会を見つめるということが非常に重視されていることが特徴です。基調提案中の、子供の生き方と関わる題材を考えていこうという提案がなされています。先生にばかり、必然性がある題材ではなくて、子供たちにとって必然性がある題材、それを考えていく必要があり、子供の生き方との関わりが重要です。ひとつの予測として、子供たちの 65%は大学卒業後今存在していない仕事に就く、人工知能等の発達によってこれから職業観が変わっていくといわれます。今後 10 年から 20 年程度で、約４７%の仕事が自動化される可能性が高く、特に肉体的な労働を必要とするものは、人工知能とロボットに取って代わり、2045 年には人工知能が人類を超え、テクノロジーが急激に発達して人間自身が変容してしまう、という指摘もあります。このような社会を生きる子供たちに、いったい未来に向けてわれわれはどうするべきなのかを、この大会のテーマは伝えていこうとしています。

「美術教育の更なる一歩」は、子供たちがどんな困難な状況になっても、未来を見つめ生き抜いていくための、知識や経験を生徒に身に着けさせていく授業を提案すること。中学校美術科は義務教育最後の段階として、何を身につける教科なのかを明確にする、まさに今回の改訂の大きなテーマであり、それが社会的に求められているのではないでしょうか。

必修教科として、教育課程一翼として役割を担っているわけですから、中学校の義務教育最後の段階そして、すべての子供たちが受ける教科として、いったい何を子供たちに身につけさせるのか、美術科の与えられている使命とは何なのか、今回はそれを改めて考えた改訂でした。国は、「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」この３つを開かれた教育課程の実現という、大きなテーマにしています。学校だけで教育を行うのではなく、社会と子供たちの学びというものを共有しながら育てていこうというのです。このことは、今までも行ってきたことですし、特に美術というものは社会とのつながりが、非常に強い教科だと思いますので、社会や地域とつながりながら授業作りをしていくということも、容易なことだと思います。その中で、この３つの柱で資質能力を整備するということ、（１）「学びに向かう力、人間性」（２）「知識および技能」（３）「思考力・判断力・表現力」これはすべての教科、科目がほとんど整備されています。これらが相互的に働くように、まずは、「思考力・判断力・表現力」から始まる授業もあるでしょうし、「学びに向かう人間性・主体的に学習に取り組む態度」から始まる授業があっても、知識や技能を身につけてから考えさせるという授業があってもいいということです。3 つの柱が、相互関係にあるということが大きな特徴です。

> 表現及び鑑賞の幅広い活動を通して，造形的な見方・考え方を働かせ，生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。
> (1) 対象や事象を捉える造形的な視点について理解するとともに，表現方法を創意工夫し，創造的に表すことができるようにする。
> (2) 造形的なよさや美しさ，表現の意図と工夫，美術の働きなどについて考え，主題を生み出し豊かに発想し構想を練ったり，美術や美術文化に対する見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。
> (3) 美術の創造活動の喜びを味わい，美術を愛好する心情を育み，感性を豊かにし，心豊かな生活を創造していく態度を養い，豊かな情操を培う。
> 文部科学省　学習指導要領　美術科の目標（平成 29 年６月より）

知識は「造形的な視点に関することを知識として示す」ということ、技能はこれまで通り「創造的にあらわす技能、技能」として位置づけていくということ、そして、「思考力・判断力・表現力」は発想や構想に関すること、鑑賞に関すること。そして、「学びに向かう力・人間性」は、「創造活動の喜びや、美術を愛好する心情豊かな感性、心豊かな生活を想像していく態度や、豊かな情操」これを位置づけて、今回整備をしました。ですから、構造は変わっていますが、これまで大切にしてきたことは、そのまま生かしながら整備をしています。これを、（１）（２）（３）と整備をし、目標を示しました。目標の上の文章、ここには「表現および鑑賞の幅広い活動を通して造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の美術や、美術文化と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す」と書

いてあります。この短い文章の中に、義務教育最後の段階で中学校美術科は、何を身につける教科なのかを、指導要領に明確に示したというところが大きな特徴です。

美術や美術文化と豊かに関わるということは、表現といっても絵や物をつくらなくても、アイディアだけといった方法。いわゆる、プランニングという職業として確立しています。表現を必ずしもしなくても、絵を見て鑑賞することが楽しいという子供や、自分のお気に入りの絵を自分の家に飾って生活を豊かにするという美術の関わりもあってもいい。今日の授業の「じっくり見ると見えてくるもの」や「学芸員になりきり展覧会」は（B）鑑賞の活動の中で目標に向かって、作品と向き合いながら、資質能力を身につけさせていくという学習。「マイ・フェイバリット・箸置き」や「水って何色どんな形」はできるだけ子供たちに近いところから題材を考え、生活と関わる題材でした。

今後これまで以上に美術科は、「生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質能力を育成する」ことが重要になります。では、この資質能力とは何か。これから子供たちに指導していくとき、目指してほしいのは、学んだものが「生活や社会の美術や美術文化と豊かに関われるような力」として身につくということです。そのために、この３つの柱を育てていこうというのが今回の学習指導要領の本筋です。例えば知識技能、１年生の色相環を教える授業で、色相環の色を順番に暗記させたからといって暗記したことが「生活や社会の美術や美術文化と豊かに関わる力」にはなりません。知識というのは、子供たちが表現や鑑賞の中で、きちんと生きて働くような知識として育てていかなければならないのです。このような視点から、どういった授業をしたらよいかと考えてほしいと思います。技能についても同じです。子供たちが自分で発想や構想したことを創意工夫して、見通しを持ちながら表現する力、そんな力を育てるからこそ、豊かな資質能力になっていくのです。ですから、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関われるような授業つくりを、新しい指導要領においては、現行の指導要領以上に取り組んでいくという願いがこめられています。

今回の大会のテーマ「美術教育のさらなる一歩」というのは、現行の指導要領をきちんとやってこそ、新しい指導要領を行うことができるということです。今年度中は、現行の指導要領の趣旨や狙いを自分の授業で実現できているかどうかを振り返り、新しい指導要領を移行しながら全面実施を迎えてほしいと思います。そして、副題の　−感じて　つくって　つなげて−　の「感じて」は、日々の生活や授業を通して色や形を感じ取る力と感受する力です。「水って何色どんな形」では、アイディアスケッチができているにもかかわらず、並べてみた後、微調整を行い、より考えている。このときに子供は自分のイメージとか全体のイメージなどを照らし合わせながら考えています。「生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質能力」にするための一つとして、美術科の特質に応じた「物事を捉える視点や考え方」を働かせていくことが大切になります。まずは、子供たち自身が、感性や想像力をきちんと働かせるような授業を作っていこうということです。表現において、子供たちが自分のやりたいことが見つけられる。鑑賞において、自分の見方や感じ方が大切にされながら、意味や価値を作り出していく、こういった授業こそが感性や想像力を働かせる源泉となると思います。次に対象や事象を造形的な視点で捉える。形・色などをイメージの視点を見つめることができるようにしていくということです。これはまさに美術科でしかできない特質であるといえると思います。

それからもう一つが、自分としての意味や価値をつくりだしていくこと。創造活動は０から物をつくりだしていくことですから、定まった意味や価値だけを学ぶのではなく、子供たち自身が意味や価値をつくっていく学習が大切です。そして、このようなことがきちんと働くような授業つくりをすることが、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質能力の育成につながるのです。今回の改訂では、この３つを造形的な見方・考え方が働くように先生方に意識してほしいことです。

そして、主体的対話的で深い学びの実現に向けた授業改善。この深い学びの鍵となるのが、先ほど説明した、造形的な見方考え方です。この見方・考え方は美術だけが載せているのではなく、小学校の図画工作にも載っていますし、それぞれの教科の特質が示され、これを働かせていこうということというわけです。「感性や想像力を働かせる」「自分としての意味や価値をつくりだす」は、ずっと歴代大切にしてきています。ここに「対象や事象を造形的な視点で捉える」ということを明記しています。一つは「対象などの形や色彩、材料や光などの造形の要素に着目して、それらの働きを捉える視点」もう一つは、「部分ではなく、全体に着目して、造形的な特徴からイメージを捕らえるという視点」この２つの視点を育てていこうとしています。これを、それぞれ「木を見る視点」「森を見る視点」と解説書には書いています。これまで感性を育てることを重視してきましたが、今回の指導要領でも重視しています。ただ、良さや美しさを感

じ取るためには、まずは、気づかなければならないのだ、ということを大切にしていく必要があります。この「造形的な視点」を子供たちがもてるようにし、子供たちが様々なものに気づいて、良さや美しさを感じとれるように、感性をこれまで以上に育てることの手立てとして、この「造形的な視点」を重視しています。ですから、デザインの学習をしたら、普段気がつかなかったけれど、家に帰って醤油のビンを見て、「あっ、この上がへこんでいるのは、ちゃんと持ちやすくするためなんだ」と、気づいたりします。「造形的な視点」が豊かになると、このように身の回りのものに気づきます。このようなことを今回の学習指導要領中学校美術では、大切にしていこうということです。

「木を見る視点」「森を見る視点」

例えば、ペットボトルを漠然と見ていてもただのペットボトルですが、「木を見る視点」が豊かになっていけば、ペットボトルの一部の色が、働きとして単調なつくりに動きを出していたり、強調していることに気づくようになります。「森を見る視点」を育てていけば、ペットボトルの全体に着目して、このミネラルウォーターの方は、全体的にさわやかな感じ、清いような感じを感じ取ったり、お茶の方は、ボトルの作りが竹のようで、和風な感じに気づいたりします。このように、「木を見る視点」「森を見る視点」で見ることで、様々なことに気づくことが期待できます。イメージについては、さまざまな捉え方があります。ゲルニカというものは、その背景、文脈にいろいろなものがありますが、子供たちはその背景や知識を知らなくても、作品からどのような意味を持っているかということを、ある程度気づきます。これは、作者の心情と作品を照らし合わせながらイメージを捉えたとき、「何かさびしそうな感じがする」とか、子供によっては「何か怒りを感じる」などと考えたりします。また、様式を知らなかったり、作風で捉えるということを知らなければ、何々みたいだと捉えられない、ということです。このように、色々なイメージを捉えられるようにしていくということです。

目標は３つの柱に基づいて整理しました。内容については、「造形的な視点」に関することは今回共通事項で知識として示しています。「技能に関すること」は「A 表現」の（２）、「発想や構想に関すること」は「A 表現」の（１）、「鑑賞に関すること」は「B 鑑賞」（１）、そして「学びに向かう人間性」は内容の中には示さずに、「A 表現」と「B 表現」及び、「共通事項」を指導していく中で、一体・総合的に育てていくというようにしています。今、４観点で評価している、第一観点「美術への関心・意欲・態度」の指導事項はここにはありません。それは、一体的・総合的に育てていこうということです。そして、一番上の「造形的な視点に関すること」これを今回共通事項として整備をしています。共通事項はこれまで通り、『「A 表現」及び「B 鑑賞」の指導を通して、次の事項を身につけることができるようにする』とし、「ア　形や色彩、材料、光などの性質や、それらが感情にもたらす効果などを理解すること。」「イ　造形的な特徴などを基に、全体のイメージや作風などで捉えることを理解する」「ア」はいわゆる、「木を見る視点」を豊かにするため指導する内容、そして、「イ」が「森を見る視点」を豊かにするために指導する内容となっています。

忘れてはいけないのは「生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質能力」ということすから、共通事項を単に、新たな事柄や言葉を暗記するような学習では困ります。そこが、きちんと「造形的な視点」として、理解できるようにしていただくことが大切です。これまでの、事実としての知識を机上だけで教えるという概念から少し脱却して、子供たちが実感的に理解できることを今回とても大切にしています。「A表現」は、作品を作って作品ができる、「B鑑賞」が作品を鑑賞して、子供が何らかの言葉や文章で表出します。しかし、上手に作品ができた、饒舌に作品を語ることができた、だけではそれが深い学びとは言い切れません。少なくとも深い学びの課程において、「造形的な見方・考え方」を働かせながら、３つの資質能力を働かせるという、プロセスがある授業だからこそ、深い学びとなっていきます。結果だけでなく、プロセスを重視しながら、子供たちの過程を見取る力が必要です。「生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる」非常に短い文章ですが、ここに大きな意味をもっているということがわかっていただければと思います。

最後は、大会テーマの副題にある「つくって　つなげて」です。大会紀要には、様々なメディアを通して創造する力や新しい価値を生み出しながらみたり、つくったりする力。他者との関わりを通して、発信する力や自分とは異なる別の世界と関係して、新しい価値をつくり出す力。ここを目指していこうというように書かれています。今回の指導要領の改訂では３つのポイントがあります。特に中学は「感性や想像力を働かせて、表現したり鑑賞したりする資質能力を相互に関連させながら育成することができるよう、内容の改善を図る。」もう一つは、共通事項がそれぞれのところで働くようにして、「発想や構想」「見方・感じ方」また、鑑賞のときに言語活動を位置づけるというサイクルで授業つくりを考えていくことです。今回改訂した指導要領を生きたものにしていくのは、先生方の力しかありません。「全ての子供たちは、豊かな存在である」ということを前提に授業を考えていくことは、今まで通りです。最後になりましたが、今回、公開授業をされた先生方、誌上発表をご準備された先生方、本当にありがとうございました。そして、この大会の全ての準備をされた関係者のみなさまに感謝を申し上げまして、私の指導講評とさせていただきます。どうぞ今後とも、子供たちをよろしくお願いいたします。

次回大会実行委員長あいさつ

葛飾区立大道中学校　　校長　殿村　靖廣

来年、平成30年度　第６ブロックの方で大会を行うということでございます。江戸川区・江東区・墨田区・葛飾区すでに実行委員会を立ち上げ、準備をしているところです。

来年度は、先ほども東良先生のほうからもありましたように、関東甲信越静地区大会と合同開催という形で今進んでおります。今日の基調提案にもありましたように、都中美の研究においては、５年ほど前から、「成長と連携、造形美術教育のダイナミズム」というような研究テーマを掲げ、毎年毎年夏季研修会、そして都中美の大会それぞれどんどん連続していこうという、やっぱりそうやってばらばらの研究テーマで行うのではなくて、一つ一つのテーマを重ねていきながら一歩一歩前に進めていこうというような形で取り組んでまいりました。来年度は、関東甲信越静地区造形教育研究大会と合同開催という形で「みつける・つくりだす・つながる～未来を拓く造形教育～」ということで11月８日９日の二日間にわたって行う形になります。11月８日は葛飾区のシンフォニーヒルズで全体会を行い、文部科学省より東良先生、岡田先生ご指導いただき、またゲスト講演としては林家たい平さんを予定しております。２日目に関しては、中学校部会・高校部会を大道中学校の方で行います。現在高等学校の部会のほうでは、１本の研究授業、中学校では都中美から３本と６ブロックからは４本計７本の研究公開授業を行う予定で準備しているところです。

また、一都10県から、それぞれの提案の誌上発表・分科会を行っていくというような１日がかりの大会となりますけれども、今日いろいろな先生方からお話があったように次期学習指導要領に向けて、一歩でも近づけるような研究大会にしていきたいと思っています。

ちょうど大道中学校も４人組の共同学習を進めています。その時にはipod、タブレットPC等いろいろな形をただ単に使うのではなく、どうやって使ってどうやって子供たちにどういう力を付けるのかというそこのところまで踏み込んだ授業が展開できたらと思いますので、ぜひ多くの先生方がご参会いただけたらと思います。

閉会の言葉

足立区立栗島中学校　　副校長　田原　好子

本日は、お忙しいなか本研究発表会にご参会いただき誠にありがとうございました。
開催にあたりましては、講師である東良　雅人先生をはじめ、たくさんの皆様方にご支援をいただき本日をむかえることができました。心より感謝申し上げます。

本大会が「未来に向けて、美術教育のさらなる一歩」さらにそのためにしなければならない、美術科としての使命を、強く感じていただける一日となったのであれば幸いです。

これで、第35回東京都中学校美術教育研究大会第５ブロック足立大会を閉会いたします。

3 研究授業・協議会記録ならびにパワーポイントを用いた誌上発表の説明

第 35 回東京都中学校美術教育研究大会　第 5 ブロック足立大会

研究テーマ

「未来に向けて　美術教育のさらなる一歩」

―　感じて　つくって　つなげて　―

研究授業・協議会

研究授業	研究授業者	指導・助言者
A 表現「水って何色？どんな形？」	足立区立第十中学校　　山本　優里	府中市立府中第五中学校 前校長　中村　一哉　先生
A 表現「マイ・フェイバリット・箸置き」	足立区立西新井中学校　久保田　李夏	八王子市立打越中学校 校長　市場　陽一郎　先生
B 鑑賞「学芸員になりきり展覧会」	台東区立上野中学校　　下斗米　麻里	中野区立南中野中学校 校長　池田　浩二　先生
B 鑑賞「じっくりみるとみえてくるもの」	荒川区立原中学校　　桐　菜摘	八王子市立中山中学校 校長　持田　　晃　先生

誌上発表

パワーポイント発表の要約

誌上発表	指導案作成者
A 表現「70 周年をプロデュース　～パッケージデザイン～」	足立区立第十四中学校　蓼沼　奈央
A 表現「渕江中に潜むヨウセイ」	足立区立渕江中学校　　志手　伸圭
B 鑑賞「校内ギャラリーを考察する」	中央区立晴海中学校　　永見　久美子
B 鑑賞「自画像に思いを込めて…」	荒川区立第五中学校　　品田　智

研究授業① A表現に関する授業「水って何色？どんな形？」 足立区

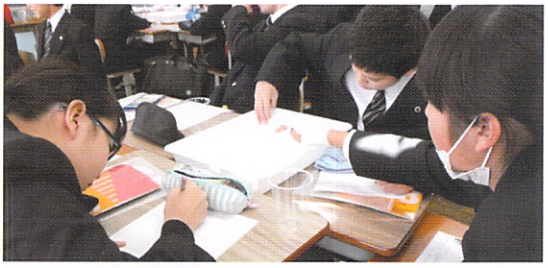
学習指導要領の項目 A表現(1)　全2時間　対象学年 1学年　足立区立第十中学校 授業者 山本 優里

題材の指導目標

・身近な存在である水を改めて観察し、とらえた特徴や美しさ、水に関する自身の経験から自由に発想して表したい主題を生み出す。
・表したいテーマに沿って、これまでの学習を基に、色や形、材料の特性を生かし創意工夫して表現する。

授業者自評

・「未来に向けて　美術教育のさらなる一歩」というテーマのなか、育むべき基礎基本的な能力は多々あるが、その中でも「今まで身に付けた能力を生かし、応用する力」を身につけられるよう、授業を組み立てた。
・今回協力してくれた生徒たちは「色の感情効果」と「物を観察し、表現する」事を既習しており、その経験を生かして本題材に取り組めるよう、特に一時間目の時間では水の観察に力を入れた。しかしその観察力が逆にあだとなり、“水の形”にイメージが固定される生徒もいたことが課題である。しかし生徒たちは本当によく、観察を行ってくれた。
・当初の考えでは題材にリンゴを使用する予定だったが、水に変更した。理由は水の方が“温度”、“触感”、“光（反射）”等表現に幅がでるので、今回の題材に最適であると思ったため。リンゴだと表現の幅が少なくなる恐れがあった。



研究協議

意見　テーマが良かったため、表現の幅を広く、より抽象的な表現にする事ができた。暗い色を使っている生徒がいたため理由を聞いたところ、「溺れた経験があって、水に対して怖いイメージがある」と答えてくれた。他者理解に通じる貴重な意見であると思う。未完成でもよいので、一人ひとりの「思い」を共有できる時間があるとよかった。

意見・質問　先生が書いてくれたワークシートのコメントを受け、思い悩み、思考錯誤を繰り返す様子が見られた。生徒は、自分に与えてくれた言葉を真摯に受け止める。教師の言葉の重みを再確認した。導入の端的な説明・助言をよく聞いていたし、一時間目の活動が制作によく生かされていた。また、材料にカラーペーパーを選んだ理由を教えてほしい。

回答　色づくりに時間をかけるのではなく、組み合わせや形、構成により時間を練ってほしかったため、カラーペーパーを採用した。

意見・質問　せっかく班の体制になっているため、話し合いの活動があってもよかった。また、抽象表現の説明はどの程度行ったのかと、評価の観点を教えてほしい。

回答　抽象表現の説明は今回していない。既習と参考作品を見せただけである。評価についてはワークシートを主とし、考えや思いを作品制作に生かせているかを評価する。

意見　抽象表現への切り替えの方法として、「見えるものから見えないものを表わす手立て」を考えることが大切である。例として、モンドリアンがやりやすいと思っている。木を水平と垂直で表す等、参考になります。

意見　テーマが水であるのならば、映像を見せてもよかったかもしれない。また、ワークシートのコメントが丁寧すぎて、抽象表現に広げる事とは遠くなっていると感じた。カラーペーパーを使用した切り絵の表現は、思考錯誤に適していたので良かった。

ご指導・ご講評

府中市立府中第五中学校　前校長　中村一哉先生

・カラーペーパーを使用して２時間だと、子どもとの関わりができていない中だと大変だったと思う。「本題材の完成」とはなにか。メインは完成ではなくて、思考錯誤が大切であった。悩み・思考錯誤する中で自分のイメージをつかみとったら、それで成功である。

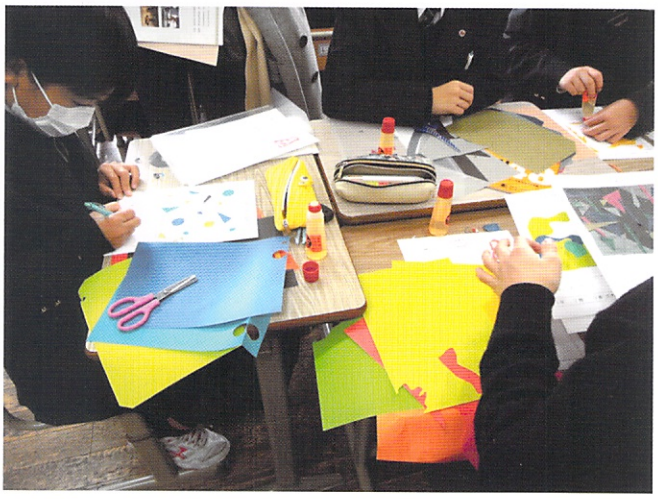
・教師の「前にやったリンゴの授業と、つながりはわかる？」という問いかけに悩んでいた。表したい主題を自分から生み出すことがとても大切であり、一人ひとりがどういう「思い」をもって制作しているのか、丁寧に扱ってあげることが必要である。「自分の思い」をどう表現に生かすのか、耕すのか、“水”というテーマはとても適していて、生徒の思いをふくらます事ができた。一時間目の内容が良く、生徒が水の“実感”を持つ事ができた。それがとても大切で、よかった。

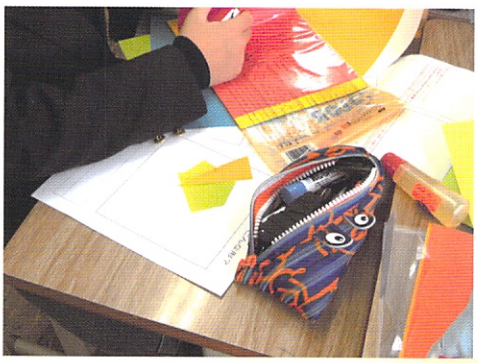
・生徒たちの発想やイメージを閉じないよう、学年や実態に合わせながら広げてあげることが必要。色の感情効果や抽象表現を丁寧にやったので、生徒がそれを生かしていた。しかしプロセスを大切にする方を優先すべき時もある。水の形や性質に、自分から気付くことも必要である。一つ一つの授業をぶつ切りに考えてしまうのではなく、この経験を生かし、次の表現につなげる事が大切。

・造形表現を豊かにする、耕す、イメージを開く経験をする中で、赤は暖かである、青は寒々しいと気付いていくことが大切。知識として知るのではなく、実感を通した学びを実現する。（ここで簡単なエクササイズとして、切って並べるだけで“円から動きがでるエクササイズ”をしてくださいました）形や色の経験を蓄積することで、次につながる表現になる。今回の授業ではテーマの「理由」をワークシートに記載し、検証するステップがあるともっとよかった。美術における言語活動を大切に、経験しながら色や形について理解を深めていくことが大切。

・「造形的見方や考え方」が大切で、創りだすという書き方は美術だけである。一人ひとりの創造的技能を育む事、そういう授業をつくっていかなくてはならない。また、子どもたちの豊かな関わりを生む授業を考えていかなくてはならない。今回の授業では＜共有する事の大切さ＞、＜イメージを広げる方法＞、＜教師の声かけの重要性＞を実感できる授業だった、その中でも一番よかったのは、生徒が悪戦苦闘できた事である。作品の完成よりも、大切である。

・商品名を表記しないよう、気を付ける必要がある。今回の題材で使用したものは「カラーペーパー」で統一するとよい。





誌上発表① A表現に関する授業「70周年をプロデュース～パッケージデザイン～」 足立区

学習指導要領の項目 A表現(2)(3)全7時間 対象学年 2学年

足立区立第十四中学校 誌上発表者 蓼沼 奈央

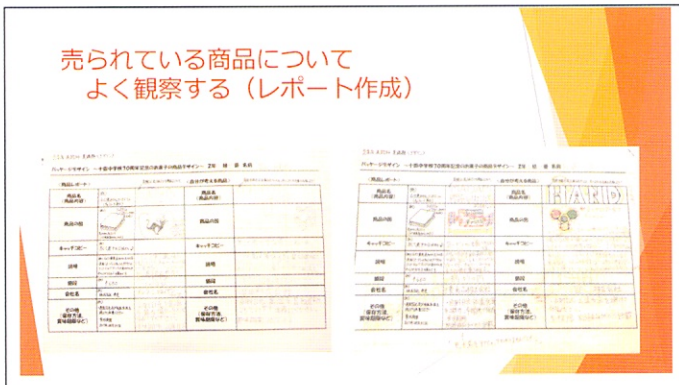
本大会のテーマと関連して

日々の生活の中に「これ面白い色だな」「このデザイン、中身が気になるな」と感じる気付きを、美術の授業を通して養いたい。そして感性を生かして、見たものを自分の言葉で人に伝えることであり、自分がものをつくることを通して豊かになっていく。また大会テーマとのつながりを考え、自分のなかだけでなく、社会とつながる作品に触れることで、デザインは楽しいだけの分野ではなく、デザインは社会の中で必要不可欠であることに気付かせたい。

題材の目標（ねらい）

○本校の創立70周年をお祝いするためのお菓子というテーマを理解し、作品制作を通して美術の社会のつながりや目的や機能、共存する美術について考え、新しい表現や考え方のきっかけにすることができる。
○テーマに沿ってパッケージのデザインを考え、色鉛筆で丁寧に着彩し、コンセプトを説明できる。

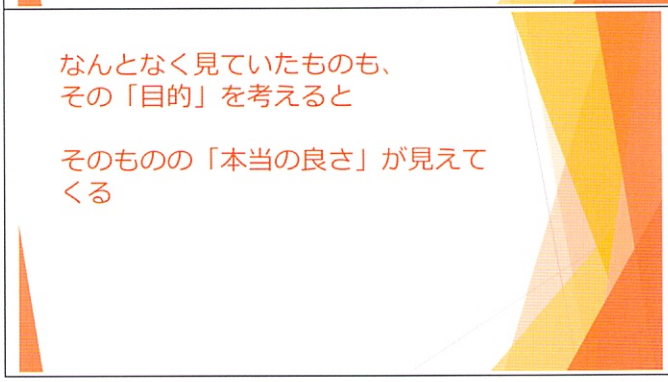
発表スライドと内容



日々の生活の中に「デザインて面白い」と感じる気づきを養いたいという思いと、中学2年生として今までに触れてきたデザインを考えるという経験ができると期待し、この題材を設定した。

実際には70周年の記念式典の準備が行われている時期に授業を設定し、創立のお祝いというテーマとしてどのような表現意図ができるかじっくり考えさせた。また、実際のお菓子のパッケージを見て確認させ、必要な情報やあると良い表示を決定し、表現意図により近付けるようにした。

この題材で意識したことは、生徒に親しみのある商品を実際に紹介することの他に、学級内の生徒作品を制作途中の段階で毎回見せることによって、同年代の級友の表現方法や作品の中にある面白さに気付かせることによって、デザインを苦手とする生徒も含め全員に作品を仕上げさせることである。よく考えられたアイデアや、美しく丁寧に作られた作品は、多くの生徒が興味関心をもった。



しかし、商品タイトルのロゴ等、凝ったデザインにするための手立てが十分ではなかったため、文字のデザインを自分のイメージ通りにつくることができず、時間がかかってしまった生徒がいた。限られた時間内に全ての生徒が取り組みやすい手立てを用意することが今後の課題である。

「気づく」力、 多角的に「ものを見る」力 社会の中で必要な能力を 「自分でものを作ってみる」ことで 育てる	「考えたものは商品化できますか。」と聞いてきた生徒がおり、美術と社会の繋がりをより実感させるため、商品化をするところまで場を設定したいと感じた。
「パッケージデザイン」 から、 美術が社会の中でどのような役割を しているのか あらためて考えさせたい	

※スライドの内容は抜粋されています。

研究授業② A 表現に関する授業「マイ・フェイバリット・箸置き」 足立区

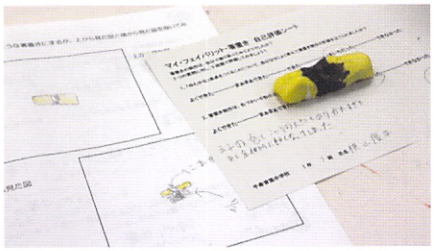
学習指導要領の項目 A 表現(2) 全2時間 対象学年 1学年　　足立区立西新井中学校 授業者 久保田 李夏

本大会のテーマと関連して

学校において生徒が様々なことを自らの身体で感じ、表現する機会を確保することは重要である。美術では、生徒が自身の目や手などの身体で感じた「いいな」「おもしろいな」を大切にし、生徒の価値観を広げていく体験を授業に多く取り入れることができる。

本題材では、「食事という生活と密接に関わる行為をより豊かにするにはどうしたらよいか」を体験活動を交えながら考え、制作する。生活に彩りを添える食卓について、実際に箸と箸置きを使ってみたり、自分のもっているイメージを単語マッピングやイラストを使って深めさせたりして、箸置きの制作を行う。生徒が生活と美術のつながりを感じ取り、より豊かな人生を送る力の育成につなげられるよう、構成を考えた。

題材の目標（ねらい）



・箸置きの制作を通して、美術と生活のつながりを感じさせると共に、主体的に生活を豊かにしていく態度や感性を養う。

授業者自評

・立体分野での授業を考えるにあたり、本校の年間指導計画の『はし』を作るというものから、はし置きを作るという題材にいきついた。

・はし置きは生活に密着し、豊かな生活を考えることから美術を身近に捉え動機付けしやすい題材であり、オーブン粘土を焼いて固まらせるという衛生的な為、適していると考えた。

・前向きに取り組んではいたがプリントの文字埋めに終始してしまい、図に至らない生徒も多かった。計画倒れになってしまった生徒も見られたが、豊かな食卓にすることに向き合うことから、生活を豊かにすることを考えられたことは良かった。

・終わらない生徒に向けては、時間短縮できるような働きかけをしてあげられるとよかった。

・授業後は実際に作品を使ってもみるように言葉かけをしていきたい。

研究協議会記録

意見：題材名の『フェイバリット』に対する生徒の反応が様々であったが、どのような説明、働きかけをしたのか。

回答：豊かな食卓（生活）というところにばかり意識がいってしまい、題材名の良さをあまり生かせなかった。もう少し詳しい説明、言葉かけができればよかった。

意見：『豊かさ』というキーワードから発想を広げていくことを大切に授業が進められていたかと思うが豊かさを考えさせるきっかけ作りはどのように行っていったのか。

回答：プリントでの説明を行いながら並行してスライドでの説明も行った。季節をイメージさせ、そこから自分がいいと感じたものを文字化し、図形化していった。参考作品として、具体的な形のもの（バナナ）を見せたところ、短時間で完成させるという制約のもと、単純に具体的な形のものに作品の方向性が向いてしまった。

意見：生徒たちには『豊かな食卓』をイメージさせるためにどのような働きかけをしたのですか。

回答：話が弾む、おいしい、嬉しいという言葉からプリントに

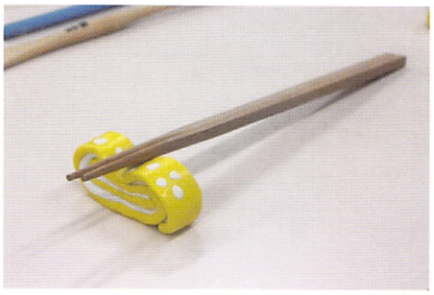
よる例を取り上げ言葉を繋げていき、自分の好きな食べ物から考えを広げさせた。作りやすい特徴的な形から発展させられる働きかけがあまり行えていなかったので、そのことは立体を考えさせる上で今後の課題となった。

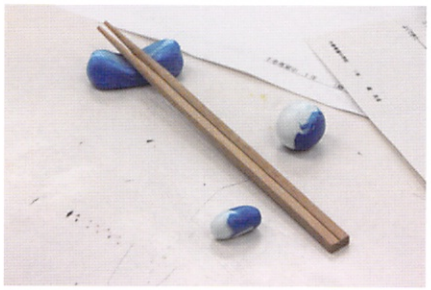
意見：今回の粘土の題材を選んだ理由は何か。

回答：カラー粘土を使用し、色彩の学習をした後で、学んだことを生かした学習にしたかった。実際に焼きこんで完成させたかったことから、今回の題材を選んだ。

意見：豊かな…というキーワードから単語マッピングというツールを利用しイメージを広げていくことは短時間で考えさせる上で有効であると感じる。イメージを広げ、作品にしていくことはこれから益々、求められるところである。子どもたちの発想力を高める上で今後益々重要になってくる美術科の領域である。

意見：今回の課題においては主眼のおき方によって様々なものが出来上がることになる。今回の授業ではもう少し指導内容について整理することができたように思う。そういう意味では未分化な題材であったと思う。形や色に込めるもの、触っての質感や一点ものであることの意味等々を意識付けさせることによる授業展開、制作前後の意味ある働きかけを行っていくことにより生徒の学びの方向性が教師のねらいに沿って定まっていくように思う。





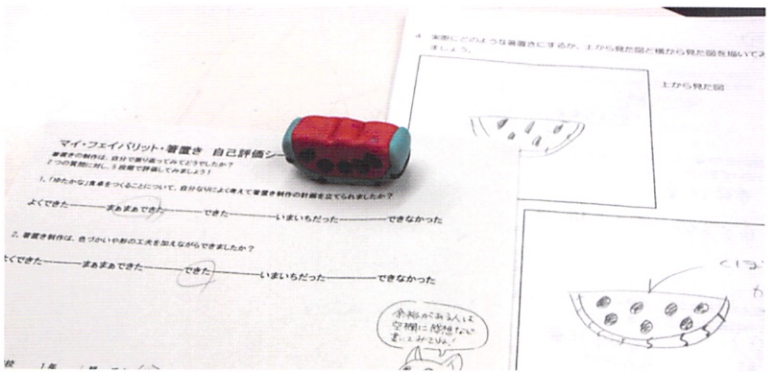
ご指導・ご講評

八王子市立打越中学校　校長　市場　陽一郎　先生

今回の授業では、生徒同士がかかわって学ぶ姿が多く見られ良かった。２時間目であったことから４人班に初めからなっていることがクラスのまとまりを作っていくうえで有効で豊かな時間であったように思う。準備・制作・片付けまでの活動において大変よく取り組めていてクラスの団結性も見られ良かった。

また、粘土を扱うことによって、造形力をつける効果もあったが、同時に色彩についても考えさせる内容であったことは少し難易度が高かったように思う。

一方で、はし置きという文化は果たして今の生徒たちに馴染みのあるものであるかは疑問である。とりかかりに、はし置きというものの持つ意味を感じ取らせ、豊かさにつなげていくという形は良かった。生活を豊かにし、自分とのつながりを考えさせ自分と向き合わせる。自分と作品とをつなぎ、生活とのつながりを感じながら物を作っていき、更には、そのことが生き方にもつながっていくことは大変意義のあることである。



誌上発表② A表現に関する授業「渕江中に潜むヨウセイ」　足立区

学習指導要領の項目　A表現(2)(3)　全7時間　対象学年　2学年

足立区立渕江中学校　誌上発表者　志出　伸圭

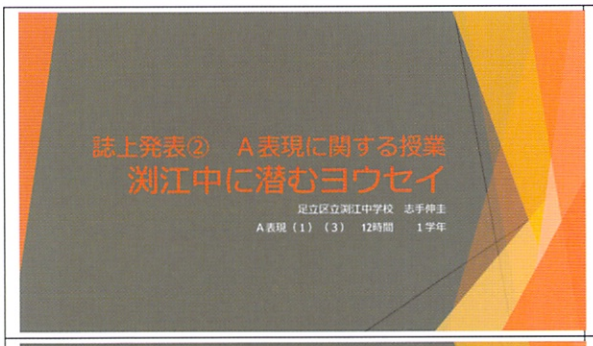
本大会のテーマと関連して

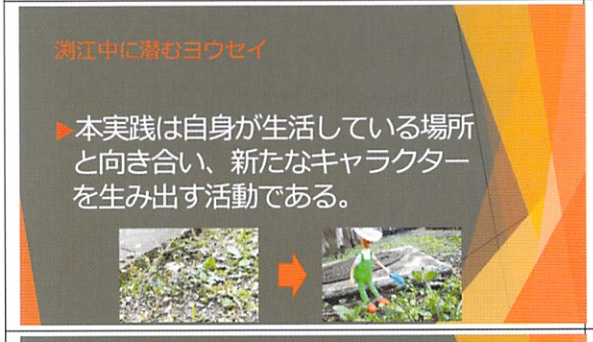
本実践は、自身が生活している場所と向き合う中で感性を働かせ、新たなキャラクターを生み出す活動である。場所から感じ取る「感受性」、また感じ取ったことからイメージを膨らませ、新たな表現を生み出す「思考力」の育成を目指す。そして、自身を取り巻く環境や、身の回りにあるキャラクターと何となく関わるのではなく、主体的にそれらと関わる力を身に付ける。

題材の目標（ねらい）

・場所から感じ取ったことを基に、「渕江中に潜むヨウセイ」のイメージを膨らませて主題を生み出し、形や色彩の効果を生かして表現の構想を練り、創意工夫して表現する。テーマに沿ってパッケージのデザインを考え、色鉛筆で丁寧に着彩し、コンセプトを説明できる。

発表スライドと内容





育てたい生徒の力
場所から感じ取る『感受性』
場所からイメージを膨らませる『想像力』
イメージを基に表現する『創造力』

まずは、ヨウセイが潜む場所を
カメラで撮影！
場所と関わって『感受性』『想像力』を働かせる

イメージを基にヨウセイをつくり出そう！
イメージを基に『創造力』を働かせる、アイデアスケッチを行い、形にしていく

	完成作品を撮ってイメージをさらに膨らませる 生徒は、主体的に活動し、非常に多様な表現を生み出した。 「場所に対する思い」が主題を生み出し表現を生み出した 『感受性』『想像力』『創造力』育まれたと感じられた。
	２０年後･･･ 「生活の場」に豊かに関わる力 主体的に「想像力」を働かせる力 そんな力になってほしいと思う。

研究授業③　B 鑑賞に関する授業「学芸員になりきり展覧会」　台東区

学習指導要領の項目　B鑑賞(1)　全2時間　対象学年　1学年　　台東区立上野中学校　授業者　下斗米　麻里

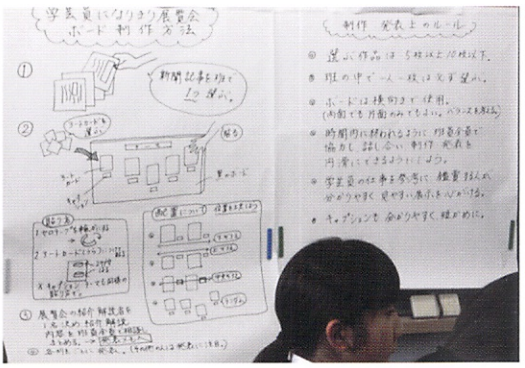
本大会のテーマと関連して

基調提案の中にある「美術教育のさらなる一歩」として、鑑賞の授業を通じて、「豊かな感性を育み、創造していくことの楽しさや難しさ、多用な価値観を感受する力」を高めるため、「色や形からさまざまなことを感じ取る力」「たくさんの作品とのかかわりの中で世界とつながる力」をみにつけたいと考える。その授業の一つとして、今回アートカードを用いて作品に触れ、その経験を生かし自分たちで美術館の展覧会を、創意工夫しながら、プロデュースし、他者へ作品のよさを伝えることで、上記の力が身に付いて欲しい。

題材の目標（ねらい）

今回の研究授業で与えられた大きなテーマ「美術館と連携した鑑賞の授業」を踏まえ、学芸員を探したところ、東京都現代美術館　学芸員　郷 泰典さんにご協力いただけることになり、ＴＴとして授業に入っていただいた。研究授業の内容もさまざまなアイディアをいただきながら、一緒に作り上げた。

指導のねらいとしては、アートカード（現代美術館に収蔵してある作品の写真をパウチしてカード状にしたもの）を用いながら、鑑賞の授業を通じ、「豊かな感性を育み、創造していくことの楽しさや難しさ、多用な価値観を感受する力」を高めるため、「色や形からさまざまなことを感じ取る力」「たくさんの作品との関わりの中で世界とつながる力」を身に付けたいと考えた。「作品に興味をもち、よく観察し、深く味わい、その世界を想像し、さまざまな視点を持つ。」ことと、「作品について対話し、他者と積極的に伝え合い、視野や考え方を広げ、多用な価値観を身につける。」ことを単元のねらいとした。　単元のねらいを受けて、授業の第１次や第２次で行なったアートカードに触れること、出されたテーマに合う作品を選ぶこと、作品を用いて展覧会を作成することで、さまざまな視点をもち、他者と意見を伝え合い、さまざまな価値観に触れ、身に付ける機会になったと感じる。



授業者自評

1、美術館・学芸員の連携についての流れを知ることができ、テーマ決めや自校での研究授業等について、郷さんと一緒に思考錯誤した時間も含めて、授業を作っていく過程も有意義なものであった。

2、生徒たちの率直かつ柔軟な発想が活きてテーマに結び付けられ、魅力的な意見をいくつも知ることができた。

3、新聞記事をテーマに用いることで生徒が社会の状況についても自分なりの考えをもち、意見を発言できる場の一つとしても役立つ教材であった。

4、グループで展覧会を企画し、作成する時間が圧倒的に足りず、発表の時間が確保できなかった。研究授業の本番で焦りもあったため、発表をする順番と班の順番を誤ってしまい、発表したいと思っていた生徒の発表の場を実現させることができなくなってしまった。

5、展覧会の制作手順について、なるべく端的に分かりやすく説明しようと掲示物などの準備はしてあったものの、伝え方が十分にまとまっていなかったため、時間がかかってしまった。さらに、実物投影機の写り方のさまざまなケースを想定した準備が不足していたため、本番直前に他のものに切り替える形で慌ただしくなってしまった。

以上の５点をふまえ、今後の鑑賞の授業やさまざまな場面でよい点・改善点共に活かしていきたい。

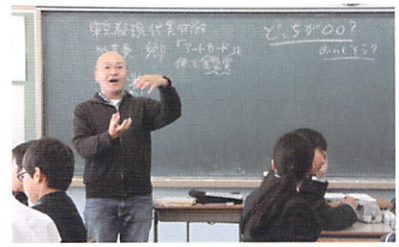
研究協議会記録

台東区立上野中学校　授業者　下斗米　麻里

・台東区立上野中学校は近辺に美術館が多いこともあり、今回は「鑑賞」の授業として、学芸員との連携をテーマに東京都立現代美術館とコラボレーションし、どのような作品を扱うか、また授業の形式を相談しながら進めてきた。大会のテーマである「感じて　つくって　つなげて」をふまえ、アートカードという題材を選んだ。班でのコミュニケーションをとりながら、現代的な作品を生徒たちが直感で味わい、新たなものを表現することをねらいとしている。大会テーマの「感じて」という部分では「作品にふれて自分の視点でとらえ、感じる」、「つくって」については「展覧会を自分たちでつくる」、「つなげて」では「班での対話を行い、班員の意見や他の班の意見を聞いて、つながっていく」ことを関連付けている。

・テーマを選ぶときに自分たちでテーマを決めることも考えたが、その幅が広すぎて難しいので、新聞記事を指導者側から提示する方法をとった。11 月 17 日に行った第 1 回目の授業では、まずアートカードにふれてもらい、そこから直感で提示したテーマに合わせたものを選ぶ活動を行った。

・反省点としては授業時間がおしてしまったことがあげられ、ルール説明の情報量が多すぎたので、簡潔にできたら良かったと思う。良かった点としては、多くの生徒たちが積極的に意見をだしながら鑑賞し、直感で作品をとらえることができていたと感じる。



東京都現代美術館　学芸員　郷　泰典先生

・前提として、東京都現代美術館は休館中のため、美術館との連携授業において、美術館での鑑賞授業ができない状況である。そこで現在は基本的に学芸員が外へ出かけて連携する、アウトリーチの活動を行っている。上野には多くの美術館があるが、各美術館の状況によっては館外での授業は難しい状況で、そもそも学芸員が外に出向くプログラムがない所が多い。

・連携授業の場合、目的がないまま「何かやってください」と漠然とお願いされるより、テーマややりたいことを授業者側から相談してもらった方が授業をやりやすい。今回は大会テーマをふまえて、アートカードを用いた授業ということだったので、相談しながら内容を決めていった。

・最初の授業では、アートカードに慣れるためにゲームを行った。また「学芸員の仕事について「展覧会のつくり方」など、学芸員特有の一歩踏み込んだ話をしたうえで、「社会との関わりのある現代美術」の特性を生かして記事からテーマを考えさせた。多くの生徒たち同士が、直感的な自分の言葉でディスカッションしている姿が見受けられた。展示の仕方についても、学芸員からの話を参考に、配置を意識して制作していた。少し時間が足りず、急ぎ足になってしまったので、2 時間扱いで深いところまで掘り下げられれば良かった。

質疑応答

質問：アートカードは東京都現代美術館側で用意したのですか？また前回も同じカードですか？

回答：今回のアートカードは東京都現代美術館オリジナルのものです。作品解説のパンフレットをパウチしたものを使用しました。前回も同じものを使用し、各班に 20 枚程度配布しました。

質問：新聞記事はどのような視点で選んだのですか？

回答：バリエーションを広くし、テーマが偏らないようにセレクトしました。文字ばかり書いてある記事ではわかりづらいので、見出しや写真の入っているものを選びました。

質問：生徒が「このカードを選ぶだろう」と予測をして選んだのですか？

回答：予測はしていませんでした。生徒の想像力に期待して…。

質問：同じカードを選んでいても、記事のテーマによって生徒の考えたキャプションが違っていたのがおもしろかったですが、それについて働きかけることは？

回答：同じ作品でもそれぞれ解釈は違っていて、その点について、できれは働きかけたかったが、今回は時間が足りなかったです。

質問：抽象的な作品に関しても生徒たちは感情をあらわせていたので驚きました。普段からそのような活動をしているのですか？

回答：自校の生徒ではないのでその点はわかりませんが、前回の授業内では行っていました。小学校の例を挙げると、北区の小学校で抽象画を描く活動をしている学校もありました。

感想：自身では鑑賞の授業が難しく、教科書を用いると作家のテーマに引っ張られてしまい、内容がなかなか広がらないのが悩みです。今回の授業では、生徒が感じたことをとてもよく表現しており、やっていること自体におもしろさがありました。こういった方向からの鑑賞授業もあるのだと、とても参考になりました。授業の意義や、社会生活の中での美術の重要性も教えている授業だと思いました。

ご指導・ご講評

中野区立南中野中学校校長　池田　浩二先生

・まずＴＴ授業なのが新鮮だった。２時間続きの授業がなくなった現状、授業時数が１年生では45分の１、２・３年生では35分の１の授業の中で、作品が軽薄で単調になりがちだが、今回の授業は内容が大変充実していた。

・外部の方（学芸員）を招いて授業を行う効果がよく出ていた。郷さんのお話から、東京都現代美術館ではアウトリーチ活動を行っているようだが、その他の美術館ではお話を断られる現状に驚いている。今年度、都中美の府中で行った研修も、専門家から話を聞ける機会となった。今回は美術館ではなく学校だが、今後は生徒を美術館に連れていくことができるとよいと思う。東京都は美術館も多く、そういった意味では恵まれている環境にあるので、全国に先駆けてこのような機会をつくっていくことが我々のこれからの課題となる。今回の授業はこれからの授業へのヒントとなるものだった。

・ほとんどの生徒が、中学校３年間で美術を学ぶのは最後となる。そのためには授業者がいくつもの扉を開けてやることが大切。今回の授業は生徒に「美術館に行ってみよう」という気にさせたと思う。夏休みの宿題でも「美術館レポート」などを出す学校は多いが、保護者からは大変でという声もある。しかしながら美術への興味、関心を高めるには大切なことだと思う。

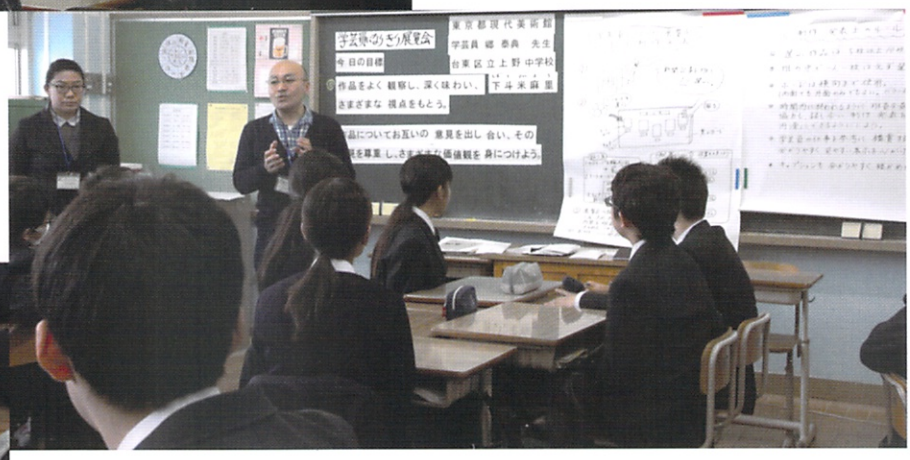
・導入時に学芸員の方が実際のチラシをもってきて示し、「個展とグループ展の違い」や「チラシを見て何に気づく？」などの話をしていたところは、美術館との連携におけるＴＴのメリットであると思う。

・今回の研究後、この授業がイベント的に終わらないよう、次に引き継いでいけるようにしてほしい。また発表できた班が６班中３班だったので、消化不良にならないよう、今後につなげてほしい。

・話し合い活動は美術の時間だけではできない活動であり、日ごろの生活から行われているものである。今回のクラスは男女ともによい話し合いができていた。他生徒との意見交換は、指導案にも記されていたように、美術の「鑑賞」のねらいのひとつとなっている。この活動では、他生徒の意見にふれ、作品を鑑賞する視点や視野が広がっていた。また１つの作品から、感情の変化の読み取りまで深められている班もあった。ただ、１時間扱いの活動としては、授業者の反省でも出ていた通り、ボリュームがありすぎたと感じる。

・近年、「表現が苦手」「語彙が少ない」という生徒が多い。国語でも成績の良い生徒が良いものを書いてくるという傾向がある。美術で伸ばす語彙力は、作品を見る視点として「かたち」「色彩」「明暗」などの共通事項を与えてやるなど、生徒が言語表現の幅を広げられるよう工夫が必要である。鑑賞では、道徳の授業と同様、正解はなく、一方的に知識を教えるものではない。お互いの意見にふれ、分かち合う授業を目指してほしい。そのためにも、今後ぜひ美術館へのオファーをして連携を積極化していくことが重要となる。

学芸員のりきり展覧会
今日の目標
作品をよく観察し、深く味わい、さまざまな視点をもとう。
作品についてお互いの意見を出し合い、その意見を尊重し、さまざまな価値観を身につけよう。
東京都現代美術館
学芸員 郷 泰典 先生
台東区立上野中学校
下斗米麻里



授業者
東京都現代美術館
学芸員
郷 泰典 先生
授
台東区立上
下斗米

誌上発表③　B 鑑賞に関する授業「校内ギャラリーを考察する」　中央区

学習指導要領の項目　B鑑賞（1）　全5時間　対象学年　3学年

中央区立晴海中学校　誌上発表者　永見　久美子

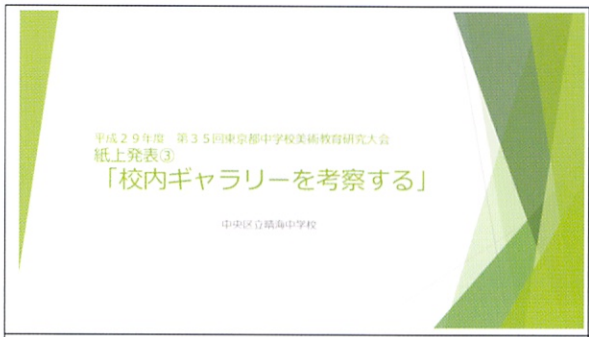
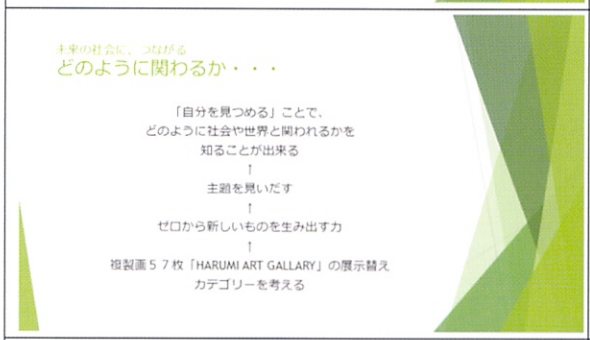
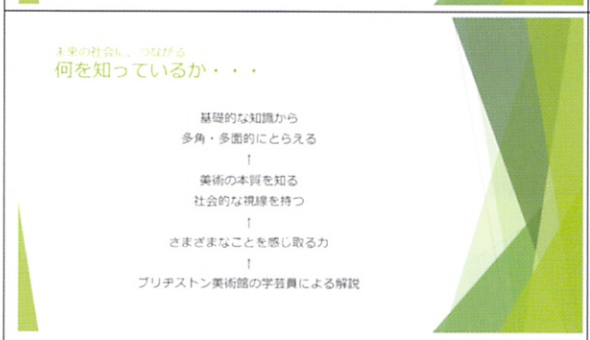
本大会のテーマと関連して

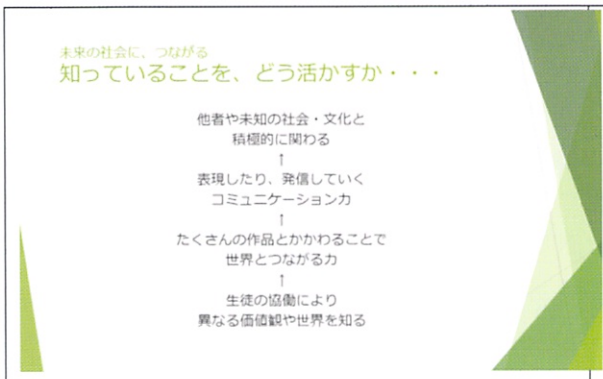
大会副題の「つなげて」に焦点を当て、絵画と絵画に意味をもたせ、生徒同士や学芸員とつながりから主体的で創造的、また多角的な面からの鑑賞活動を行う。美術館との連携や新たな過程を経験しながら、他者との関係を深めることや実感を伴いながら理解を深めることで、生徒一人一人の資質や能力の向上と自己実現を図ることが可能になると考える。さらに、自らの価値意識をもって協働作業を行うことから、美術だけでなく社会や未来の世界ともつながることが可能になると考え本題材を設定した。

題材の目標（ねらい）

・本校に点在する 57 枚の複製画を用い、美術館と連携して得た知識等を活用しながら展示の配置換えを行う。
・「見る」ことから「見せる」ことへの思考の変容をたどる中で生まれる共感的・批評的な姿勢から、多面的・多角的に見るといった態度や力を育成する。

発表スライドと内容

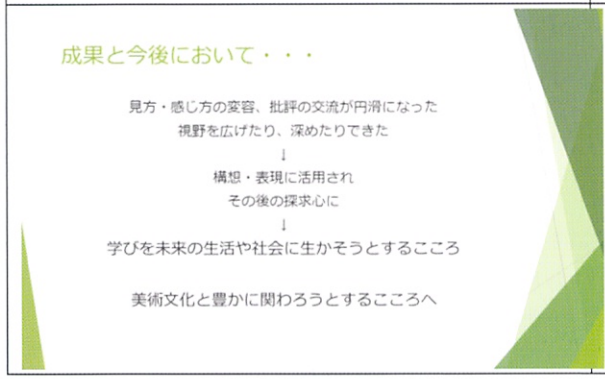
	本校に点在する複製画「HARUMI ART GALLARY」の展示替えを通して、生徒一人一人に美術の価値を意識させ、自ら生活している空間を美しく豊かに彩る美術の役割を感じさせることを目的に、生徒が協働的に活動する鑑賞学習を行いました。
	生徒一人一人が複製画の作品に対して、多面的・多角的な感じ方や考え方を持つこと。また、新たな価値意識を見つけること、「見る人」に新たな発見を促す展示テーマを考察することを目的とした授業を展開しました。 その中で、主題を見つけることが可能になるなど、ゼロから新しいものを生み出す力が育まれ、生徒自身が思考の変遷をたどり、美術を通して、学校や社会とどのように関わっていくかを知るための素地が出来たと感じます。
	学芸員による授業を行いました。専門的な知識を持つ学芸員の解説は、作品を深く味わうことが出来ただけでなく、感じ方・見方や知識を広げることができました。 その後、校内展示の複製画や身近な作品に対し、個々の意見や感想を発表し、相互の価値観の違いを意見交換することで、生徒一人一人が味わい方の幅を広げ、客観的な視線で作品を鑑賞したり、理解を深めることができました。 今回の取組内容は美術的な知識だけにとどまらず、コミュニケーショ ン能力の育成を含む社会性の育成や、美術におけるリテラシー（作品を多角的に見たり、主体的・ 批判的に鑑賞する力の獲得など）が期待できると考えます。



生徒による協働作業は、感覚的に確認できる材料・形・色を媒介にしているため、より一体感を味わうことのできる活動になりました。

また協働作業を通し、学ぶことと社会や世界とのつながりを意識できるようになりました。

何を知っているか･･･、何ができるか･･･、知っていること・できることをどう表現するか深く考え、そして「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」という問いを持ち、取り組みました。それが一人一人の生徒の自己実現につながることになると考えます。



※スライドの内容は抜粋されています。

研究授業④　B 鑑賞に関する授業「じっくりみるとみえてくるもの」　荒川区

学習指導要領の項目　B 鑑賞（1）　全2時間　対象学年　1 学年　　荒川区立原中学校　授業者　桐　菜摘

本大会のテーマと関連して

美術の授業を通して、作品をじっくり鑑賞し、自分の感覚で感じ取ったことを言葉で表現できる力を育てたい。そのため、他の人と作品に対する思いや考えを説明し合うなどして、自分と違う視点や発見について考え、見方や感じ方を広げ、新しい価値観を作り出すことの楽しさや喜びを感じて欲しい。また、今後の制作に主体的に取り組む力を付けたい。

題材の目標（ねらい）

色と形が鮮やかに見えることができるタブレット PC の利点を活かした鑑賞活動を行うことで、じっくり鑑賞し、形の良さや美しさを自分の感覚で感じ取り、言葉で表現できる力を育てる。また、他の人と作品に対する思いや考えを説明し合うことで自分と違う視点や発見について考え、新しい価値観を作り出す事の楽しさや喜びを感じ、今後の制作につなげて主体的に取り組む力を育む。

授業者自評

・日頃から、生活している上で美術の作品をじっくり見る機会はあまりないと感じていた。そこで生徒が親しみやすい 2 つの作品を比較しながら形や色、雰囲気などに着目し豊かな視点をもって鑑賞する力をつけ、作品に対する理解を深め、美術を愛好する心情を育みたいと考え題材を決定した。
・授業ではタブレット PC に触れたことがない生徒も多く、興味を持って自分たちで作品画像を拡大、縮小しながらじっくりと作品を鑑賞することができた。
・このクラスの授業は 2 回であったが意欲的な発言が多く、活発に意見を発表できる雰囲気で授業が進行した。
・作品を鑑賞する段階として、一人で鑑賞、二人、四人、全体と意見を交わすことで、互いに新しい発見や深い学びに発展することができた。
・意欲的に意見を交わすために、班活動で一人一回は確実に発言する決まりを設けた。司会者と発表者をあらかじめ決めておくことにより話し合いが円滑に行うことができた。
・生徒が積極的に意見を交換し、興味関心を持って授業に参加することによって発展していった。鑑賞する作品の選定については生徒の実態を把握し、計画的に授業デザインする必要がある。

研究協議会記録

授業者自評
・タブレット PC を使用した鑑賞ということで、タブレット PC と電子黒板を利用した授業なので、両方の機器を再度学びなおし実施した。
・生徒が紙で鑑賞するより鮮明に見て鑑賞することができたのではないかと思う。

課題面
・授業時間のやりくり、特に片づけ時間のロスを改善できるのではないかと思う。
・操作に十分慣れないと、授業展開として用意しておいた画像が、先に全体表示されてしまうなどミスがある。

質疑応答

質問：比較鑑賞としたこと、また、この二作品を選んだ理由は何ですか。
感じ取ったことを言葉で表現する力を育てたい、伝える力をつけたいという二点でしたが、伝えることに力点を置かれた理由は何ですか？

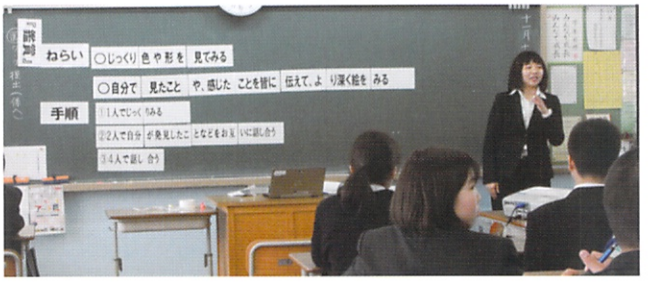
回答：1 年生の鑑賞なので発想しやすいものを選びました。
大会テーマの「つなげる」という点から比較するという意識を付けて、一回で完結する鑑賞ではなく、学んだことをつなげる鑑賞にしようとしました。
見て感じ取るだけではなく、指導要領の改訂の実施にむけて、「主体的に動く力」「考えたことを表現し、つなげる力」が明記されているため、他者との意見交換の部分に設定しました。指導要領改訂にむけて、

見て感じ取るだけではなく「主体的に」という力が提示されているため、その力を他者との意見交換に設定しました。

質問：鑑賞の評価項目に「感じ取ろうとしている」「他者に伝えようとしている」とあるが、この授業にどのように見取り、評価しているのですか。

回答：絵を見て何があるかを読み取る（例：月がある）、そして自分の発見をどのように発展させて人に伝え表現する力、を授業とワークシートから読み取っています。

意見：生徒同士の話し合いや発表活動を通し、見方が個人、グループ、クラスで意見を述べ合うことで視野が広がっていた。



それぞれの作品のよさは似ているようで違う、今回の授業を通し価値観の深まりをどのようにつなげていくのかというのは気になった。

鑑賞は版画作品をつくるから版画の作品を鑑賞させるということがあったが、模写などの様々な展開が期待できるのかなと思った。

ワークシートの一人、二人、グループと段階を踏んでいるので、自分の見取りを伝えたいと思うのだが、その機会が必ず設けられているのがよい。

鑑賞を通して様々な作品や作者を知り、３年間を通してどう発展させていくのか気になった。

質問：タブレット PC の管理や使い方と、タブレット PC を使った鑑賞のよさとを教えてください。

回答：タブレットＰＣは、教室の後ろ等に置かれ、授業で必要な時に取り出して使用しています。調べ学習やプレゼンテーションの実施など、一般社会に出た時に絶対必要な力として様々なところで活用しています。

質問：タブレット PC や ICT 機器の指導者の使い方、研修会などは実施していますか。

回答：荒川区では、校内で詳しい先生に教えていただくことと、区でサポートや修理をしてくれます。

意見：タブレット PC は、アートカードと違って細部をしっかり見られる良さがあった。

質問：今回の授業は、似ているところと違うとことの比較を行ったが、この深まりとはどんなところですか。

回答：似ているところと違うところを探すことで、生徒が興味を示しやすい。それをきっかけに、気付いたことから推論し、話し合いとで深めていってほしい。

荒川区教育研究会　中学校美術科研究部　顧問　荒川第三中学校　清水　隆彦　校長先生

・新学習指導要領へ向け、主体的・対話的深い学びを各教科どう具体化するかが重要である。今回のように、他者の視点を知ることを通し自分の考えを広め、自分の考えを見直すことにもなる。
・タブレット PC を使用することで、自分から作品に近づく見方と、対象画面を近づかせる見方など、様々な見方を生み出す授業デザインが可能になる。

ご指導・ご講評

八王子市立中山中学校　　校長　持田　　晃　先生

・子供にとって鑑賞は「見させられる」もの。今日の授業を通して何を感じ取ったかは、最後の感想の部分が特に評価に値するのではないかと考えられる。その観点に立って見ると、ワークシートの記入欄も適切かどうかが見えてくる。個々の意見の発表とは、自分の視点ではない、気付かなかったものを言われることである。これによって視点と思考の幅を広げることで、この鑑賞の学習活動にとって必要なことである。であるから、授業のはじめの個の意見を考える時間はとても重要である。一人一人がなぜそう思ったのか、なぜそう感じたのかを深めていくことが大切で、それらを発表し合う事で、新たに知った視点から、新たに子供自身が考えていく時間をとるとよい。

教師は子供の発見した「見方」を取り上げたり、強調したりすることが大切である。ただし教員の発言した言葉に生徒は引っ張られ、表面的な見方からグループでの話し合いをとおして、そこを抜け出して深めていくことができるようにしていくとよい。発言が多いが書けない生徒には「よい意見だね、じゃあそれを書いてごらん」などと声かけをして書かせる、その書かせる積み重ねも大切である。

誌上発表④　B 鑑賞に関する授業「自画像に思いを込めて…」　荒川区

学習指導要領の項目　A表現(1)、B 鑑賞(1)　時間　7時間　対象学年　1学年

荒川区立第五中学校　誌上発表者　品田　智

本大会のテーマと関連して

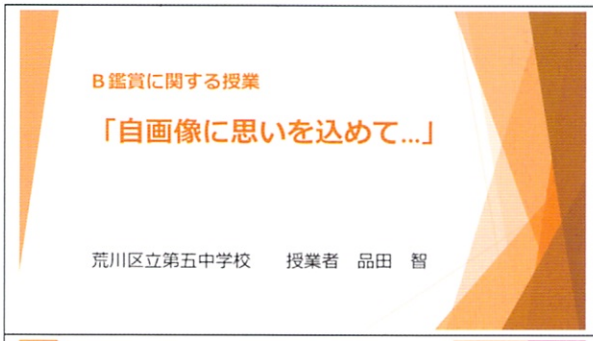
自画像を描く際の手立てとして、ピカソを始めとする様々な画家の自画像や人物作品の鑑賞を導入で行った。作家たちが表現方法や発想に込めた心情や思いを感じ取り、生徒同士が互いに言葉で説明し合うことで、いろいろな見方や感じ方を共有し、深めることができた。特に、ピカソが年代によって大胆に変化する作品を、生徒は新鮮に受けとめ、表面的な上手さや美しさよりも自分の内面に目を向け、自画像制作を通じて新しい価値を創造し自分自身と向き合うことが大切であることに気付いたように感じられる。

今後も鑑賞活動を充実させることで、表現の特性や自分なりの美意識や価値観をもち、作品のみならず美術文化に対する関心を一層高めるとともに、創造する喜びや制作意欲の向上へとつなげていきたい。

題材の目標（ねらい）

・様々な画家の自画像や人物作品の鑑賞を行うことで、色づかいや形態、その表情などから作者の心情や思いを感じ取り、自身の制作における発想や意図、表現の工夫につなげる。また、自画像の完成後に作品に込めた思いや意図、工夫した点などを説明し合い、互いの共通点や相違点を知り認め合う態度を養うことで、相手を理解し尊重するとともに自己肯定感を育てる。

発表スライドと内容

	～目標～ ①作者の心情や思いを感じ取る。 ②自分の作品の発想や意図、表現の工夫につなげる。 ③互いの共通点や相違点を知り、認め合う態度を養う。
	＜　活動内容　～第１次～　＞ ①様々な画家の自画像作品の鑑賞を行う。 ②作者の心情や表現の工夫などをワークシートに記入。 ③グループで自分の思いや考えを説明し合う。 ＜このような手段を通じて…　＞ ①作者の心情や思いを感じ取り、発想や意図、表現の工夫につなげる。 ②新しいものの見方や価値観に気付く。
	＜　活動内容　～第２次～　＞ ＜意欲的で、想像力豊かな作品に！＞ ◎従来の写実的技法から離れ、様々な画家の幅広い表現に触れることで、生徒の自由な発想力と創造力を引き出すことができた。 ＜その結果…＞ ①表面的な上手さや綺麗さよりも自分の内面に目を向けるようになった。 ②自画像制作を通じて、新しい価値を創造し自分自身と向き合うことが大切であることに気付いた。

＜活動内容 -第３次-＞ ① 自画像に込めた思いや意図などをワークシートに記入。 	＜ 活動内容 ～第３次～ ＞ ①自画像に込めた思いや意図などをワークシートに記入。 ②グループで作品を鑑賞し意見の交換。 ③グループで代表作品を１点選び、クラス 全体で鑑賞。 ＜このような手段を通じて… ＞ ①話し合いを深めることで、互いを理解し尊重する態度を養うことができた。 ②互いの共通点や相違点を知り認め合う態度を養うことで、自己肯定感を育てることができた。
生徒作品 	＜本題材を通じて・・・＞ ①ピカソをはじめとする様々な画家の自画像などを鑑賞し、それらを参考にすることで、自分なりの新しいものの見方や価値観に気付くことができた。 ②表現活動においては、自分の思いや感情を自画像に込めようと、想像力豊かにのびのびと意欲的に制作に取り組むことができた。 ③鑑賞活動を通じて作者の内面に迫ることで、作品に対する新たな発見が生まれ、自分なりの価値を見出すことができた。 ④作品から受けた印象などを発表し全体で共有することで、生徒一人一人の作品に対する見方や考え方が深まり、さらに表現力や発想力を大きく伸ばすことができた。 ⑤作品に自分の思いや意図を込めることで、初めて作品は発信する力を持ち、他者とかかわることにつながるということを、話し合いや発表を通じて持たせることができた。

※スライドは抜粋です。

4

第35回 東京都中学校美術教育研究会　第5ブロック大会 足立大会 大会運営組織一覧

大会会長	江川誠志	練馬区立三原台中学校校長
都中美事務局長	前田康夫	練馬区立光が丘第二中学校副校長
大会委員長	茜谷佳世子	足立区立竹の塚中学校校長
大会副委員長	永井　均	中央区立佃中学校副校長
	平井邦明	台東区立忍岡中学校校長
	清水隆彦	荒川区立第三中学校校長
	田原好子	足立区立栗島中学校副校長
大会運営委員長	石橋　龍	足立区立千寿青葉中学校
大会研究局長	大黒洋平	荒川区立諏訪台中学校

運営局（事務・庶務）

足立区

局長　石橋　龍（千寿青葉中）
次長　日比谷彰子（竹の塚中）
　　黛　美登里（鹿浜菜の花中）
局員　丹野律子（第四中）
　　重浦真由美（第五中）
　　小鑓康子（第七中）
　　金古恵子（第九中）
　　山本優里（第十中）
　　峰村　勝（第十一中）
　　佐藤弘文（第十二中）
　　鈴木恵理子（第十三中）
　　蓼沼奈央（第十四中）
局員　坂東由香里（新田学園）
　　志手伸圭（渕江中）
　　長谷川詩子（東綾瀬中）
　　唐沢美紀（花畑中）
　　小澤俊一（蒲原中）
　　久保田李夏（西新井中）
　　井上智宏（江北桜中）
　　中川園子（伊興中）
　　久保田常子（谷中中）
　　佐久間善紀（入谷南中）
　　大家美幸（六月中）
　　小林龍馬（千寿桜堤中）

研究・編集局

荒川区

局長　大黒洋平（諏訪台中）
次長　佐々木美緒（第三中）
局員　小林秀樹（第四中）
　　品田　智（第五中）
　　金子晴美（尾久八幡中）
　　宗廣優子（南千住第二中）
　　桐　菜摘（原中）

台東区

局長　大谷智子（御徒町台東中）
局員　冬木嘉人（柏葉中）
　　西山真衣（柏葉中）
　　下斗米麻里（上野中）
　　大山泰子（忍岡中）
　　平山久仁子（浅草中）

中央区

局員　永見久美子（晴海中）
　　水上智美（日本橋中）

5 第36回 東京都中学校美術教育研究会　第6ブロック大会 のご案内

第58回　関東甲信越静地区造形教育研究大会

東　京　大　会

第57回　東京都図画工作研究大会　城南大会　～都図研７０周年記念大会～
第36回　東京都中学校美術教育研究会　第６ブロック大会

発行：東京大会編集局　２次案内

大会テーマ

みつける　つくりだす　つながる
～未来をひらく造形教育～

１日目

平成30年11月８日（木）

内容：全体会・各種会議・講演会

場所：かつしかシンフォニーヒルズ

講演会講師　武蔵野美術大学客員教授、落語家

林家　たい平　氏

演題「美術教育を受けて　いま落語家でいること」

２日目　　11月９日（金）

内容：幼稚園・小学校・中学校・高等学校　授業公開
　　幼稚園・小学校・中学校・高等学校　分科会

場所：幼稚園：江東区立第三大島幼稚園
　　小学校：品川区立第三日野小学校
　　中・高等学校：葛飾区立大道中学校

指導・講評：文部科学省 教科調査官

岡田　京子　先生
東良　雅人　先生

１１月８日の全体会において林家　たい平さんにご講演いただきます。
演題は「美術教育を受けて　いま落語家でいること」です。
林家　たい平さんは武蔵野美術大学をご卒業され、落語家としてご活躍されています。
公式ウエブサイトのオフィシャルページにはご自身で描かれたイラストが「たい平ギャラリー」として掲載されています。
是非、全体会にご参加ください。

＜林家　たい平さん経歴＞　オフィシャルページより

昭和６２年　武蔵野美術大学造形学部卒業
昭和６３年　林家　こん平に入門
平成１２年　真打昇任
平成２０年　第５８回　芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞
平成２２年　武蔵野美術大学芸術文化学科　客員教授就任
日本テレビ「笑点」大喜利メンバー

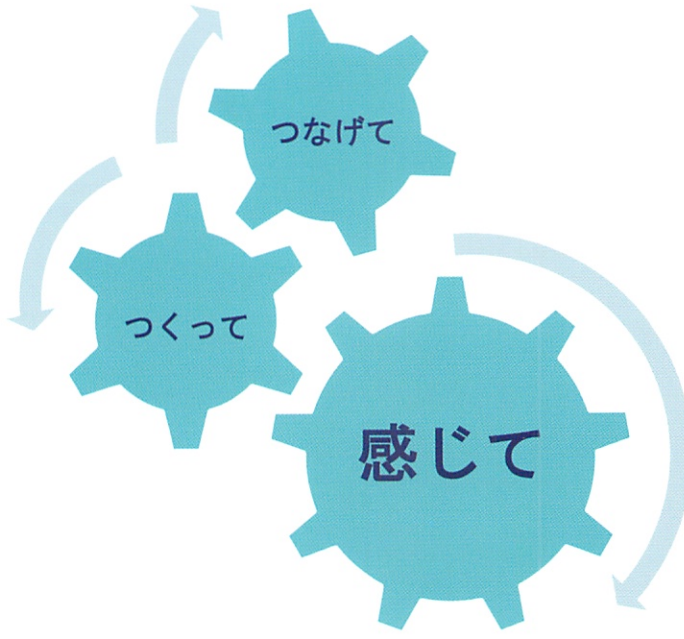
関東甲信越静地区造形教育研究大会東京大会実行委員長　本間　基史

お問い合わせ
大会事務局長　伊藤貴光
【葛飾区立西小菅小学校】
TEL 03-3602-6388
FAX 03-3838-5741

主催：関東甲信越静地区造形教育連合　東京都造形教育協議会
　　東京都図画工作研究会　　東京都中学校美術教育研究会　　東京都高等学校美術工芸研究会

水って何
目標
やること

まずは、1人でじっくりと…


つなげて
つくって
感じて